ふりかえる裾野

発刊によせて

『ふりかえる裾野』は、『広報すその』の一つのコーナーとして、184回・12年6か月の長きにわたって連載されたものです。

広報紙への第1回掲載は昭和58年4月15日号にさかのぼります。当初、裾野地方の懐かしい思い出を広報紙で紹介してほしいとの要望があり、田口勝夫氏に写真と文章を寄稿していただいたのが始まりです。毎号貴重な写真と軽妙な文章で、戦後の富士山麓の素朴な暮らしぶりが紹介され、『広報すその』の人気コーナーとして多くの市民に愛され続けました。

田口氏の温かい眼差しの感じられる写真は、現代人が忘れかけた素朴な心や、ひたむきに生きることの大切さを、そっと語りかけてくれるようです。時代が昭和から平成に移ってからも、それらが私たちの心に一層強く訴えかけてくるように感じられます。

この本には、昭和20年代後半から、昭和30年代の裾野地方の思い出が凝縮されています。この思い出は、寄稿者・田口氏の思い出のみならず、同時代に生きた人たち共通の思い出ではないでしょうか。『ふりかえる裾野』の出版が、戦後の裾野地方の風俗習慣を記した読み物として、多くの皆さんが一読され、懐かしい記憶として、21世紀へ伝える貴重な史料ともなりうるものと期待しています。そして、戦後50年の節目の年にあたり、私たちが歩んできた道のりを、振り返っていただく一つのきっかけとなれば幸いです。

終わりに、田口勝夫氏は平成7年8月13日に永眠されました。事実上、『ふりかえる裾野』は、氏の遺稿集となりました。

平成7年10月1日

裾野市長　大橋俊二

カメラを手にする若き日の田口氏（左側）

田口勝夫氏プロフィール

大正7年1月30日、駿東郡小泉村に生まれる。昭和26年4月、小泉村役場に奉職。昭和51年9月、企画調整部長を最後に裾野市役所を退職。その後、行政書士として活躍、昭和61年4月～62年3月富沢区長を務める。

『広報すその』紙上に、昭和58年4月15日号～平成7年8月15日号の期間、計184回にわたり『ふりかえる裾野』を連載。平成7年8月13日永眠。

題　字＝裾野市長・大橋俊二
表　紙＝町民体育祭（昭和30年代前半・県立裾野高校グラウンド）
裏表紙＝昭和20年代の御殿場線（深良上原）

目　次

1．ツツジの年内開花に成功　2．11人の十里木分校　3．愛鷹橋完成 …… 4
4．田植　5．おかいこさん　6．大きなカヤ葺き屋根の家 …… 5
7．パイスケ　8．モンペ姿　9．ぶどう巨峰 …… 6
10．大畑橋の流出　11．牛とともに　12．十里木の富士山 …… 7
13．稲こき　14．炭俵編み　15．木の葉かき …… 8
16．沢庵だいこん　17．タキギ作り　18．富士の裾野で酪農 …… 9
19．どんどん焼き　20．青春の乙女　21．春がきた …… 10
22．草競馬　23．桜の下で野点ゆかしく　24．俳諧の道 …… 11
25．お茶つみ　26．葛山のモウソウ竹　27．田植風景 …… 12
28．山里の童たち　29．高冷地の試験ほ場造成　30．愛鷹山鋸岳の渡り …… 13
31．真夏の山麓　32．プール用地の造成工事　33．白滝の舞 …… 14
34．辛苦と汗の結晶　35．竹ステッキ　36．銀波輝く草原 …… 15
37．倒れた稲架　38．ブナの原生林　39．公共事業の労力奉仕 …… 16
40．春を呼ぶ童たち　41．まりつき　42．木炭を焼いたころ …… 17
43．梅花ほころびる頃　44．さつまいもの苗作り　45．黄瀬川のますつり解禁 …… 18
46．水ぬるむ頃　47．桜の花咲く季節　48．苺露地栽培の当時 …… 19
49．宗祇法師をしのぶ　50．懐かしい十里木分校　51．田植の頃の幼な子 …… 20
52．竹細工の盛んな頃　53．自然は偉大で恐ろしい　54．農家の働きもの …… 21
55．真夏の田園風景　56．中駿大同団結の日　57．愛鷹山登山道調査 …… 22
58．郷土の生んだ政治家　59．裾野市の基礎を作った人々　60．今は見られない秋祭りの山車 …… 23
61．椎茸の植菌作業　62．ヒッパリッコ　63．帰郷 …… 24
64．出初式　65．岳麓に見る牛馬力　66．一ぷくするおじいちゃん …… 25
67．あの頃の農業近代化事業　68．山羊といっしょに　69．彼岸過ぎての麦の肥 …… 26
70．旧裾野市役所の庁舎　71．田園の一隅で　72．田植、掛け声が聞こえるようだ …… 27
73．大畑橋の今昔　74．町民会館落成式典　75．合併祝賀式典 …… 28
76．観光資源調査の一行　77．竹カゴ屋さん　78．裾野市の発展を築いた政治家 …… 29
79．裾野町役場職員元旦の思いで　80．思い出の政治家　81．市民スポーツのはしり …… 30
82．懐かしい十里木の顔　83．柳端橋の竣工式　84．アシタカツツジの現地調査 …… 31
85．七夕豪雨を省みて　86．耕運機牽引車に軽免許が必要　87．婦人会の視察見学の思い出 …… 32
88．観光資源開発調査の記念写真　89．カヤギ刈りのころ　90．農業視察研修の思い出 …… 33
91．岳麓の美人の思い出　92．農技連のメンバーたち　93．懐かしいキウイのハウス育苗 …… 34
94．十里木共同給水施設の竣工式　95．いしくのわざ　96．景ケ島・依京寺について …… 35

97. 黄瀬川の増水　98. 下刈り競技大会の思い出　99. お年寄りとの語らい …… 36
100. 大野原所見　101. 運搬具の移り変わり　102. 十里木の今昔 …… 37
103. 新年初仕事の日　104. 十里木氷結とその利用　105. 懐かしい町役場職員 …… 38
106. 農場山はどこに　107. 十里木の今昔Ⅱ　108. 裾野音頭に寄せて …… 39
109. 竹林さまざま　110. 五龍の滝、昔の吊り橋　111. タバコ栽培のころ …… 40
112. 収穫近く　113. ひのきの伐採　114. 輸出用の竹ステッキ材料 …… 41
115. 郷土の政治家をしのんで　116. 郵便屋さん　117. 御神木との決別 …… 42
118. 水車小屋のある風景　119. 乙女ごころ　120. 田植えの思い出 …… 43
121. 屏風岩の景観　122. 三菱アルミとの調印式　123. 矢崎電線裾野工場の竣工 …… 44
124. 深良村が裾野町に合併 当時の町議会議員　125. 須山浅間神社　126. 竹細工との思い出 …… 45
127. 元旦の富士山　128. 故人政治家を偲ぶ　129. 鈴原橋の竣工 …… 46
130. 子どもの会結成準備会　131. 修行の道程だろうか　132. 郷土の偉大な政治家 …… 47
133. 巨峰ぶどうの昨今　134. 黒富士によせて　135. 旧須山登山道を歩いた思い出 …… 48
136. 宗祇法師の歌碑　137. 沢庵大根収穫のころ　138. 柿の木の思い出 …… 49
139. 子どもの元旦　140. 旧庁舎屋上からの景観　141. 愛鷹橋の架け替え前 …… 50
142. お姉ちゃんとまり遊び　143. わが家の付近　144. 春の収穫量評定 …… 51
145. 丸江伸銅敷地内無縁仏供養の読経　146. 涼を求めて　147. 町民体育祭の思い出 …… 52
148. 富士山御殿庭の思い出　149. 稲の坪刈りの思い出　150. 青果市場の今昔 …… 53
151. お茶のけいこ　152. 水車の思い出　153. 麦の省力栽培が始まったころ …… 54
154. 裾野ライオンズクラブ認証式　155. 児童植樹リレー　156. 宗祇法師の旧墓所 …… 55
157. おかいこさん　158. 子ども会リーダースクラブ勉強会　159. 竹枯し試験の思い出 …… 56
160. 忠ちゃん牧場　161. 農繁期の思い出　162. 麦まきのころ …… 57
163. ツツジの早咲き試験　164. 富士山とカヤブキ屋根　165. 千福共同作業所の完工 …… 58
166. 草競馬のあったころ　167. 麦の刈取機実演　168. 養蚕のころの思い出 …… 59
169. あのときのおじいさん　170. 子ども会リーダースクラブ研修会　171. みつまたの栽培 …… 60
172. パイプ工場のあったころ　173. 工場敷地のその後　174. 富士マサ抜きを始めたころ …… 61
175. あのころの裾野駅前通り　176. 十里木の思い出　177. 十里木の思い出Ⅱ …… 62
178. 旧市民会館のオープン直前　179. お茶の香り　180. わが家の子供たち …… 63
181. 巨峰ぶどう栽培の推移　182. 御殿庭のおもいで　183. 須山登山道 …… 64
184. 四ツ溝柿の品評会 …… 65

1. ツツジの年内開花に成功

撮影：昭和39年12月22日

つつじの花は、促成しても年内には咲かないものとされていた。県農業試験場においても、伊東市田代で3年間試験を行った結果、年内には開花不可能との結論を出した。

翌年、小生の研究した超促成開花計画を持ち県農業試験場に行き説明、試験場でも成功すると判断し、県、町の共同試験を実施した。その結果、全国初の12月開花に成功した。

この写真は、翌年小生のビニール・ハウス内にて12月15日に開花させたものである。

2. 11人の十里木分校

撮影：昭和31年7月6日

この写真は、今から27年前の須山小学校十里木分校の懐かしい風景である。

11人の児童が下校するスナップ・ブランコと鉄棒の体育授業、写真の主役達は今では中堅社会人として活躍しており、その子ども達もちょうど写真の年齢位で、元気に通学していることでしょう。

この十里木分校は、昭和41年3月31日に閉校となり須山小学校に統合され、今ではもうありません。

3. 愛鷹橋完成

撮影：昭和34年5月

▲昭和55年12月
竣工の「新愛鷹橋」

▼当時の竣工式

台風と豪雨災害により、愛鷹橋は危険にさらされていた。水窪区民は一丸となって国に陳情を続けた。

故遠藤三郎代議士の御協力を得て、国の補助による架替え工事が承認され、念願かなった竣工式典を迎えたのである。当日は、故遠藤代議士も出席された。

4. 田　　植

撮影：昭和28年6月22日

あの頃の農家は、田植の季節が来ると猫の手も借りたいほどの忙しさで、大麦、小麦の取り入れから始まり、田すき、堆肥肥の運搬、撒布、タロ刈り、畦塗り、荒代、苗取り、苗くばり等々と、田植前夜は水配のため眠る時間もないほどであった。

素足で田の中に入るため麦の刈株で生傷の絶え間がない。足の速い馬では、鼻取りも代かきもどろんこ、どろんこを飛ばして早乙女さんに叱られたものです。

こうした風景も、今は昔の懐かしい思い出、明るい唄声が聞えて来るような一幅の風物詩を見る想いがします。

5. おかいこさん

撮影：昭和29年7月

今から50年～60年以前には、郡内でも養蚕が盛んに行われていました。戦中、戦後の食糧難にぶつかり、ひたすら食糧増産のため桑園はつぶされて、養蚕は姿を消してしまいました。

子どもの頃、「まゆかき」（まゆを取り出すこと）の手伝いをするとテッポー玉（あめ）がもらえたものです。当時の農家にとって、おかいこさんと崇められていました。

今でも、二本松にカネボウシルク蚕種製造所があります。その関係で蚕種用の養蚕が富岡方面の一部で行われていたが、これも姿を消してしまったのではないだろうか。

6. 大きなカヤ葺き屋根の家

撮影：昭和29年7月

麗峰富士の偉容、広い高原を背にして大きくどっしりと構えたカヤ葺き屋根の家。雨にも風にもゆるぎなく移り来た歴史を年輪に刻み、幾星霜を経た面影は、大きな風景をも圧して巨木さえも小さく見えます。

さあ、これは何処の風景だったでしょう。今は市内でもヤカ葺き屋根の家は数えるほどしか見られないことと思います。

残念ながらこの写真の家も今は見ることができません。ありし日の十里木を偲ぶ想い出の写真となりました。

7. パイスケ

撮影：昭和29年7月

リヤカーに積まれて出荷を待つ、これは何と言うもので何に使用するのか、戦後生まれの人達にはなじみの少ないものと思います。

これはパイスケと呼ばれ運搬具の一つで土木工事などでは土の運搬用として肩にかついで使ったものです。箱根山には竹が多く生え箱根竹と呼ばれて、この竹で竹ごうりやパイスケを製造（手編み）して各方面へ出荷しました。茶畑あたりはこの産地として知られていました。

戦後はあらゆる面で機械化が進み、家内工業的な手労働による製品は姿を消していきましたが、パイスケも当時をしのばせるものの一つです。

8. モンペ姿

撮影：昭和29年7月

戦後から今日にいたる衣服、ことにご婦人方の衣類の流行の推移は、目を見張るものがあります。戦中の服装と言えば、男子は国民服、女子はモンペと決まっていたようなものでした。

戦後、化学繊維の開発によって衣類の様相が変わり、有名デザイナーが生まれ、今やファッション界は花盛りです。

このような時に写真のような戦後の一時代を思い出します。モンペ姿にスゲ笠、清楚なこの装いは、くったくのない乙女の笑顔に清純むくな気品さえ漂わせて、まさに飾りなき最高の衣装でした。

9. ぶどう巨峰

撮影：昭和29年8月

ぶどうの巨峰と言えば、露地ぶどうの王として知らない人はない程になっております。この巨峰ぶどうが静岡県の原産である事を知っている人は少ないようです。

巨峰は、田方郡中伊豆町上白岩の大井上静一先生が、多年の研究努力により作り出された品種です。市内（当時湯野町）の先進農家の方達も、さっそく巨峰を導入して栽培しました。

甘味も良く、品質良好ですこぶる評判が良かったのですが、巨峰の栽培は難点が多く、非常に労力を要したため、人手不足と気象的条件が重なり、ついに栽培を断念するに至りました。今では1～2戸の農家が栽培を続けているものと思います。

10. 大畑橋の流失

撮影：昭和31年９月

大畑橋、今は鉄筋コンクリートの近代橋ですが、この頃は歴史保存的な木橋で、映画の時代劇撮影に利用されたことも度々あったものです。

昭和31年９月の台風で、黄瀬川が増水し、大畑橋は流失の危険にさらされました。この日の夕刻、黄瀬川の増水はしだいに高まりました。紙布工場へ浸水したため、消防団が出動していましたが、大畑橋が流失の危険にさらされているので、厳重注意の知らせが出されました。

この写真は当日の午後５時頃撮影したものです。ものすごい風と雨で、この程度の撮影しかできませんでした。その夜、午後８時頃この大畑橋はついに流失してしまいました。

11. 牛とともに

撮影：昭和29年９月

古来から、農家の動力の主たるものは馬でした。どこの農家にも馬一頭は必ずと言ってよい程飼われていました。

戦時中は農家の馬も軍に徴用されて飼養頭数は減少してゆきました。戦後馬に代わって農耕用に牛が飼われるようになり、馬車運搬等の専業者は別として普通農家は牛を飼養して農耕、運搬に使用していました。

「オーイ、牛にエサをくれたかョ」「ハーイ……、もうすぐよ、待っててね」、牛も家族の大事な一員として、こんな会話が聞こえてくるような往時を偲ばせる一場面です。

12. 十里木の富士山

撮影：昭和30年10月

美辞麗句を並べても言い表わせないほど秀麗な富士山の全容は、広大な原野に裾をひき、さまざまな景観を織りなして、眺める人々の目を楽しませてくれます。

このような富士山の姿も眺める場所によって大きな変化があります。三国峠の富士、河口湖の富士、朝霧高原の富士、等々どこから眺める富士山もみなそれぞれの景観ではありますが、この十里木の富士山こそ本当に美しい富士山で、他所では見られない自慢の一つでした。

この景観も、開発によって今は違ったものとなりました。

13. 稲　こ　き

撮影：昭和30年10月

戦後の食糧増産の掛け声に乗って、農家の人達は朝早くから夕方暗くなるまで頑張りました。

今と違って全部の農作業が肉体労働を伴うものでしたので、稲こきも朝から夕方まで脱穀機を踏み続けると、翌日の朝は足が上がらないほどでした。

今は専業農家も少なくなり、兼業農家が多いので農作業も機械にたよることになり、稲刈りからかからうすまで機械作業となりました。

あの頃は大変でしたが、扇風機や箕やむしろも大切な農作業の器具であり、懐かしい想いにかられます。

14. 炭 俵 編 み

撮影：昭和30年11月

今は燃料といえば、ガソリン、灯油、ガス、電力等で薪炭を使用している家庭はほとんど見られません。昔は山つきの地区では、炭焼きが盛んに行われており、裾野でも須山方面は木炭の産地として有名でした。

木炭は、焼き上がると俵に詰めますが、この炭俵はすべて手編みで主としてご婦人達の仕事でした。秋になると大野原に出て材料のカヤ刈りをするのですが、この仕事もまた大変だったそうです。

昔の人は皆、大変な仕事を手作業でやり遂げたのですね、今はもう見られない作業風物詩の一つです。

15. 木の葉かき

撮影：昭和26年11月

この頃の農家では、秋の収穫がすみ、麦の種子蒔きが終わると、木の葉かきが始まります。この木の葉は、サツマグラ（甘藷の苗床）や春野菜の苗床の保熱材料として、また苗床終了後の堆肥として欠くことのできないものでした。山林の雑草を刈り、木の葉とともに丁寧にかき集め束にして馬力に乗せて運搬し、庭へ山積みにするのです。

馬力とは馬に引かせる荷車のことで、この馬力が農家最大の運搬車でした。毎日馬力に木の葉を山ほど積んで、正月前にどれだけ沢山積み上げるか隣り近所で競い合ったものです。この風物詩も今では見られません。

16. 沢 庵 大 根

撮影：昭和30年12月

木枯らしが吹き始めると、沢庵漬用大根の収穫が始まりますがこの農作業は昔も今も変わりなく行われています。しかし、現在は沢庵大根の栽培も非常に少なくなり、せいぜい農家の自家用程度の栽培にすぎません。

沢山栽培された頃は、どこの農家でも1週間くらい収穫が続きました。大根の栽培は山畑に限られましたので、大根を洗う水を山畑まで上げる仕事も一苦労だったのです。木枯らしの中の大根洗いは、たちまち手がヒビ割れてしまうのです。のどかな風物詩に見えても、現実は楽な作業ではなかったのです。

17. タキギ作り

撮影：昭和29年12月

端麗な富士山を背景に萱葺屋根の母屋と物置離れ屋、板壁にぎっしり掛けられたトウモロコシ。冬の日差しを浴びながら、庭でタキギ作りをしている農家の主婦。いかにものんびりした風景に見えますが、この頃の燃料はすべて薪炭だったので年間にはかなり多量のタキギを必要としたわけです。ことに須山十里木方面は寒冷地のためなお多くを必要としたわけで、タキギ作りも重要な作業であったわけです。今は何処を歩いてもこのような場面は見られなくなりました。

18. 富士の裾野で酪農

撮影：昭和29年1月

厳然としてそびえる麗峰富士悠久変わらぬその偉容は、新春を迎えた私達に勇気と希望を湧き立たせてくれます。裾に広がる見渡す限りの枯野原は、冬の厳しさと若草の萌え出る春を連想させます。

今から30年前、酪農を志した青年がこの地を借りて乳牛の飼牧を始めました。牛舎も、居住する小屋もすべて自分の手で作り、ランプ生活を送りながら辛苦に堪えて酪農一筋に命をかけてきました。今は功成り、名とげて社会のために尽力しておりますが、ランプ生活をしていたあの頃が懐かしく想い出されて新春を思い新たにします。

19. どんどん焼き

撮影：昭和33年1月

1月14日はどんどん焼きの行事が行われました。

このどんどん焼きは、変わりなく続いていますが、これを迎える子ども達には時代を反映した移り変わりがうかがえます。

夕方の冬霧は強く、底冷えのする寒さにもめげず、喜々としてどんどん焼きに向かう子ども達の表情が、いかにもうれしそうだったのが想い出されます。

この子ども達も今は父母となっており、かわいい子どものためにダンゴを作ってどんどん焼きに送り出したことでしょう。

20. 青春の乙女

撮影：昭和30年2月

小春日和の静かな陽光に、若い二人の顔はいきいきと輝いて見えます。戦中の不自由な時代を送った子ども達も、戦後はこんなに良き青春が待っていました。

仕事の合間の一ぶく、話ははずみます。カスリのモンペ染めに手っ甲、姉さんかぶりの手ぬぐいも板について、本当に若々しい娘達ですね。

さあ、いいかげんで仕事にかからないと、もうすぐお昼になっちゃいますよ。

21. 春がきた

撮影：昭和29年3月

戦後ようやくにして衣食住が好転してきた時代です。子ども達や娘さんの服装の移り変わりがうかがえると思います。

ここは富士農園の茶園で、道の両側はお茶畑でした。製茶工場も古くからあったのですが、今は不二聖心女子学院の敷地となっています。

春になると、若い人達のピクニックや小学校の子ども達の遠足でにぎわったものです。畑仕事の姉ちゃんをお迎えに、今は見られないこの風景も、懐かしい想い出の一つです。

22. 草　競　馬

撮影：昭和29年３月

馬は農家にとって重要な働き手の一員でした。農耕にも、運搬にも馬の力を借りなければ農業経営はなりたたなかったので馬を大切に扱ってきました。

どこの地区でも馬頭観世音が祭られていたものです。春の彼岸あたりを期して祭が行われ、数地区が持ち廻りで草競馬が行われたものです。馬場には優勝旗が林立しています。優勝旗を目指していざ出場。愛馬も馬上の人も、日頃の仕事とは勝手が違います。

スタートの旗が振られても後ずさりする馬や、横道にそれる馬があり、大さわぎでした。今は馬といえば、乗馬クラブか競馬場の馬ぐらいしか見られなくなりました。

23. 桜の下で野点ゆかしく

撮影：昭和32年３月

春の彼岸が過ぎると，間もなく桜の季節が巡ってきます。

あの頃は，戦後10年を経てようやく衣食住も安定のきざしをみせ，人の心にもゆとりが出てきた時代でした。この写真は，あるお茶の会の人達が，桃園山定輪寺の寺内をお借りして野点の会を催した時のものです。

石の階段を登ると，右手鐘つき堂の前に桜の老木がありました。たしかシダレ桜だったと思います。年代はわかりませんが老樹と思われる桜で枝もわずかに残っている程度でしたが，巡り来る春を忘れずに見事な花をつけてくれました。この桜花の下の野点はまことに風情ゆかしく心の和らぎを覚えています。この老桜樹も今はありません。

24. 俳 諧 の 道

撮影：昭和32年４月

今は俳句と言いますが、昔は俳諧、俳書の道と言われていました。これは，俳句をよくする人達と、私達写真仲間が合同しての俳句の会で、写した写真を展示し、俳句の先生方がこの写真を見て俳句を作るものです。

今は故人となられた定輪寺37代住職・中村一雄大尚生をはじめ、そうそうたる俳句の師匠さん方が参加して俳句を作ってくれました。素人目にも一見して俳句の先生と呼ぶよりも、俳諧の師と呼んだ方が適切な風俗と言えるでしょう。こうした風俗も今では見られなくなりました。

25. お茶つみ

撮影：昭和35年5月

昔は、茶つみといえば手でつむものと限られていました。

カスリの着物に手甲脚絆、赤いタスキにスゲの笠、これが茶つみ女達の風俗でした。戦後はこうした風俗も変化を見、茶つみも機械化して、特殊茶以外はすべて機械つみになりました。

この写真は、手つみから鋏刈りになったころのものです。場所は富士農園の茶園ですが、茶つみの変化とともにその風情も消えてゆくような一抹のさみしさを覚えたものです。茶つみ唄が聞こえなくなり、唄の代わりに鋏の音では何となく味気なさを感じました。今は富士農園の茶園もなくなりました。

26. 葛山のモウソウ竹

撮影：昭和34年5月

竹といえば京都を連想しますが、裾野市の葛山地区には、すばらしい竹林がたくさんありました。タケノコの出る季節になると、商人が買い入れにやってきました。毎日タケノコを積んだトラックが何台も、葛山から出たものです。この写真は、葛山のある竹林で撮影したものです。力強くまっすぐ伸びたモウソウ竹と、はつらつとした娘さんの姿態が、いかにもマッチしていると思いませんか。企業が千福、葛山地区へ進出して開発に着手し、広大な地域を買収したため、葛山の竹林も買収面積の中に入り、かなりの面積が減少したと聞いていますが、まだまだ残っているものと思います。

27. 田植風景

撮影：昭和33年6月

田植の季節は猫の手も借りたい忙しさと言われ、朝に夕に星を頂き、というように、文字通り暗いうちから暗くなるまで働いてもなお、猫の手が足りない程の忙しさに耐えて田植の日を迎えたものでした。

田植のエイを組むと言い、女何人男衆何人が必要かを数え、田植に来てくれる人をお願いして田植をし、来てくれた人のところの田植に行き、エイを返すと言いました。

忙しい中にも、田植当日となれば農家のお祭り行事とも言われ、朝6時ごろ田植を始めて夕刻は2時か3時に終わり、そのあとはできる限りのごちそうをして、飲めや歌えの大盤振る舞いをしたものでした。

天気はよし……富士もよし……久根の里の田植風景です。

28. 山里の童たち

撮影：昭和33年6月

私たちが子どものころは、だれもがはなをたらしていたものです。

もちろん当時はちり紙など持っていないから、着物のそでで横ぬぐいするから、そでは光っていたものです。

現代は食生活が豊かになり、子どもたちも体質が変わり、はなを出さなくなったと言われます。

この童たちではなを出している子はおりませんが、当時の山里の童たちの風俗をうかがい知ることができるほほえましい一場面です。見慣れない人がカメラをかまえたので、何をするのだろうかと一様に疑惑の目でみつめているのを覚えています。

この童たちも今は社会の中堅となり、ちょうどこの年齢の子どもたちの親となっていることでしょう。

29. 高冷地の試験ほ場造成

撮影：昭和36年7月

このころの農業園芸はあらゆる作目について促成栽培の方向に進んでいた。しかし温室に入れて加温しても、開花や結実をしないものがあった。これは加温以前にある期間、冷気にあてないと不可能であることが判明された。岩野市では「園芸のベルト方式」を試み、標高差と温度変化を利用することにより見事に成功した。

この写真は、標高1,450mの須山水ケ塚の山上約50aを須山振興会から借り受けて試験ほ場を造成しているところです。この試験地によって全国初のツツジの促成栽培に成功したのをはじめ、イチゴの促成栽培や夏ギクの超促成など多くの栽培試験を成功させました。

30. 愛鷹山鋸岳の渡り

撮影：昭和30年7月

富士山よりずっと古く海中に噴出した火山で、何回となく爆発を繰り返して3,000m近い富士山型火山になった。

その後、頂上部が大爆発を起こし、現在の姿になったと言われる愛鷹山は、危険な岩場、深い原始林、長い稜野、非常に変化に富んだ山です。

最高峰の越前岳（1,505m）から呼子岳、鋸岳、位牌岳、袴腰岳、愛鷹山といくつかの峰が連なっている今なお奥深い山です。すでに何人もの遭難者をだした鋸岳の岩峰はもろい岩場で、越えて行くも巻いて行くも、楽観を許さない悪場であるから、愛鷹山を縦走する人は、充分に慎重を期して事故のないようにしましょう。

31. 真夏の山麓

撮影：昭和33年8月

下界の猛暑をよそに、ようやく雪も消えて黒富士の姿が見られます。今日も何百人、何千人の人たちが登山をしていることでしょう。この地は、今も健在で佐野に住まわれる鈴木翁が歌人若山牧水を案内して、終日足を運んだころの山麓と変わらぬ景観を残していることでしょう。

この日は、東京の知人と同行したのですが、「空気がおいしいですね。」と嘆声を残していました。終日雑踏と騒音に囲れた生活を送っている都会人にあっては、この自然の偉大さを、いつまでも忘れないことでしょう。

住みなれて、忘れかけた私たちをハッとさせます。

今日も下界は熱い一日となりそうです。

※鈴木翁（鈴木浚一氏）は、平成5月11月17日永眠されました。

32. プール用地の造成工事

撮影：昭和36年5月

当時の裾野町財政は予算規模も小さく、豊かな町とはいえなかったが、発展途上の自治体として整備しなければならない公共施設は目白押しに数えられていた。その一つ、町営プールの建設については、自衛隊の協力を仰ぐことによって建設費の軽減がはかられた。昭和36年5月ころ造成工事が始まり、7月14日、プール開きとともに完成式典が行われ、当日は、フジヤマのトビウオとしてオリンピックにその名を上げた小池礼三氏を迎え、模範泳法が行われて式典に花をそえてくれたものです。この写真は、縁の下の存在的造成工事に黙々として取り組んでくれた自衛隊員の働く姿です。

33. 白 滝 の 舞

撮影：昭和31年9月

戦後10年、戦時中の悪夢を振り払うかのように市民の間に文化の波が高まってきた時代と言えるでしょう。これは沼津にある秋山バレエ研究所の方たちが、バレエを自然の中に溶けこませた踊りを演出しようと熱心にけいこをしている一場面です。

この場所がおわかりでしょうか。私たちが日ごろ見なれているせいか見過ごしてしまいますが、白滝です。（大畑橋すぐ上の白い瀬）自然を破壊から守り、後世により多く残すとともに、文化の創造は私たちに課せられた義務と言えるでしょう。

緑と文化の町裾野をますます飛躍させるようにしましょう。

34. 辛苦と汗の結晶

撮影：昭和29年９月

台風は２、３度やってきたがさしたる被害もなくまあまあの稲作。今日は農業委員会の稲作作況調査が行われる日。

「おやじさん、どうだね今年のできは。」「うん、まあまあだね。」「ころばなかったから、とれそうだな。」「毎年ころばすんでな、今年はチッソをひかえ目にしたんで、このぶんじゃあなんとかいくべえ。」調査員と農家のおやじさんの会話が聞こえる。

やみ米時代のピークは去ったが、まだまだ食糧増産の時代、「今年の供出米はどのくらいになるかなあ、まあとれないよりもいいがな。」おやじさんの独り言が、辛苦を刻んだ顔の深いしわ、がっしりしたキセルを持つ手にあんどが浮かぶ。

35. 竹ステッキ

撮影：昭和32年10月

戦前、戦時中、戦後と、長い年月続いてきた福島軽工業の竹ステッキ作りも、今は姿を消しました。竹の皮を取り、節を削り、まっすぐに伸ばし、えを曲げ、染色乾燥して仕上げる。当時は、郡野で唯一の輸出品でした。その用途については詳しく知りませんが、葬儀の参列者が持っていき、墓地に立てるとか聞いていました。

ステッキのほかに、昔のたばこは、朝日以外の巻たばこには吸い口がなかったので、竹パイプとキセルに使うラオが作られていました。竹パイプやラオは、戦後、たばこの変化に伴ってその姿を消していきました。

懐かしい工場の庭も、今日、パチンコ遊戯場の駐車場となっています。

36. 銀波輝く草原

撮影：昭和34年10月

十里木忠ちゃん牧場東北側あたりの小高い丘に立つと、東富士演習場のひょうひょうたる大草原が見渡される。

秋ともなれば、演習場立ち入り日を利用して、地元権利者がセンブリなどの薬草を採取して歩く姿があちらこちらに見受けられるが、それにも増して、銀色に輝く雄大な草原の穂波を見に訪れる都会からの家族連れが目につく。

見渡す限りススキの穂が、秋の日差しを受けて銀色に輝き、風になびく穂波はまさに銀波の寄せるごとくでまことに壮観な眺めです。

質素の中に愛くるしさを思わせるあのころの乙女、銀波の中に配するにふさわしく、懐かしい想い出の草原です。

37. 倒れた稲架

撮影：昭和33年10月

いまは、農作業も機械化が進み、稲刈り、脱穀もコンバインにより、ほ場で即時に行われるが、戦前は稲刈りといえば平干しに限られていた。戦時中あたりから掛干しを行うようになったが、これも大変労力のかかる作業でした。掛干し中に台風や強風が吹くと頭痛の種でした。

「見ろ、オンバクでロクな仕事をしないから、おまえらのやったところはみなひっくり返ってしまったぞ。早く行って起こしてこい。」親父によくどなられたものです。この掛干しのやり直し作業がまた大変でした。稲は雨にぬれて重いし、足は作り替えねばならないし…今は遠い思い出の一つで、見られぬ光景となりました。

38. ブナの原生林

撮影：昭和30年11月

「この木なんの木気になる木」、歌の文句ではないけれど、なんの木と思いますか。そう、ブナの原生林です。この地方でこのようなブナの原生林は他に見ることはできません。

植物学上では、ブナの植生は十里木が南限と言われているので、学術的にも貴重な存在です。

この原生林は十里木にある朝霧の井戸の森で、幾年月の年輪を刻んだものか計り知ることもできません。

10数年も前に、県農業試験場の調査団と共に愛鷹山へアシタカツツジの調査に行ったとき、畔子畔あたりにはブナの老木がたくさん枯れているのを見ました。この森のブナはいつまでも健在であることを祈りたい。

39. 公共事業の労力奉仕

撮影：昭和33年11月

日進月歩、もう古い言葉になったようですが、すべての面で機械化が進み、肉体労働が減少しました。建設工事にあっても、コンクリートは電話一本で生コン車が工事現場に到着、直ちに打ち込み、高い所へは圧送車でコンクリートを送り打ち込む。人力では手元作業ということです。戦後はようやく動力の練り機が登場した。手練り作業が動力化しただけでも大きな力となった。

この作業に従事している人たちは当時、模範農家の中堅グループで、この作業は、部落内の公共事業に従事しているところでしょう。現在公共事業と言えば役所まかせですが、当時はこのように地元の人たちが力をあわせて工事を行ったものです。

40. 春を呼ぶ童たち

撮影：昭和32年12月

「お正月がきたならば　こっぱのようなもちを焼いて　赤いおべべにゲタはいて　タコを揚げたりハネついて　ペッタンペッタン　まりをつく」

今は昔、富士農園の茶園でこの童たちと会ったとき、私が子どものころよく母が歌ってくれた童唄を想い出していた。貧しい里の子ども心にいかにお正月が待ちどおしかったことか。

この子どもたちの家庭は決して貧しいとは思えない、むしろ恵まれているのだろう。春を早くこいと呼んでいるような明るく無邪気な表情に、自分の子どものころを想い出しながら将来への力強ささえ感じたものです。

41. ま り つ き

撮影：昭和30年1月

戦前は別として、戦後の10年はあらゆる物資が不足していましいた。今は、お金さえ出せば何でも入手できる時代になりましたので、子どものおもちゃも高級なものがたくさん出回っていて驚くほどです。

昔は、お正月の子どもの遊びといえば、男の子はタコ揚げ、コマ回し、女の子は羽根つき、まりつき。男女あつまってカルタ取りや百人一首に夜の明けるのも忘れて興じたものですが、このごろでは、こうした遊びも珍しくなってきました。戦後まもない子どもたちは、質素な衣服を着て寒さにも負けず元気にわらべうたを歌いながらまりつきをしたものです。

42. 木炭を焼いたころ

撮影：昭和29年2月

戦前私たちの地区にも炭がまが2つほどありましたが、所有者は山持ちの旧家のもので、小作農家はこのかまを借用して炭を焼いたものです。もちろん私たち貧乏な農家では木炭を暖房用などには使用できません。養蚕をやったので、春蚕や晩秋蚕の時期には蚕室の暖房用に木炭が必要でした。戦後はタバコ栽培を始めたので、タバコは蚕蚕飼育の桑に弊害があったため蚕蚕をやめ、木炭もそれ程使用しなくなりましたが、正月用などに1かまくらい焼いたものです。

かまに火を入れるとだれかが火の番をしたものです。この娘さんとこのだれかって、ご想像にまかせましょう。多分50歳近くなっていることでしょう。

43. 梅花ほころびる頃

撮影：昭和30年２月

梅の花といえば、私たち年代の者は菅原道真の歌を思い浮かべます。

東風吹かばにほいおこせよ梅の花
　あるじなしとて　春なわすれそ

この地方で梅といえば熱海の梅園が有名ですが、私も拾数年前に梅まつりに一度は行ってみようと友人と共に行ってみましたが、観光客が多く人波の中で花をめでるなどという気分にはなれませんでした。

戦後、富沢や萬山に梅園が出来ました。しかしこれは個人の栽培梅園でしたので花見をやるわけにはゆきませんでした。

桜の花はらん漫、梅の花は清そ、この娘さんも梅の花におとらず清その感じの娘さんでした。

44. さつまいもの苗作り

撮影：昭和33年３月

甘しょ（さつまいも）は、この地方の特産物で、ことに愛鷹山ろくの富沢内野山地域で栽培されたさつまいもは品質味がよく、主として関西方面に出荷されて最高値で取引され、広くその名を知られていました。

戦中、戦後の食糧難時代に至っては、さつまいもが米についで重要な食糧となり、都会からは買い出しが押しかけてきたものです。

こうしたわけで、さつまいも栽培の重要ポイントは苗作りでした。苗床の作り方や、温度の調節になかなかの技術を要したものです。温度があがりすぎて種いもを全部くさらせてしまったなどの失敗がずい分とあったものです。

45. 黄瀬川のますつり解禁

撮影：昭和32年４月

戦後10年、このころは国民生活も敗戦のショックからようやく立ち直り、落ちつきを取りもどしてきた時代です。しかしまだまだ物資も乏しく生活に余裕もありませんでしたが、このような中で黄瀬川のマスつり解禁日は、おとなも子どもも楽しみに待っていた一日です。

昭和31年９月の豪雨により大畑橋は流出しましたが、まだ新しい架橋工事は始まっていません。仮橋の上下でつりを楽しんでいる人たちを見ると、現在のつり人たちに比較して服装も、つり道具も、いかにも質素だと思えませんか。

当時の世相をうかがえるような気がします。

46. 水ぬるむ頃

撮影：昭和29年４月

乙女の青春とは、こんなにも明るく、美しさに輝いていました。この頃は戦後６年を経て、サンフランシスコ平和条約が成立し経済も立ち直りを見せ、ようやく平和の光りが見えてきたときでした。

見合いをして婚約の話しがきまり秋にはお嫁にゆくことになったと話していました。青春の日の何ものにもたとえようのないよろこびの日々、全身の熱さを冷たい水でこころよくさましているかに見えました。

この年の４月１日を期して、泉村、小泉村が結婚（合併）をし裾野町となり光り輝く裾野市となる一歩をふみだしました。

この娘も、この年を生涯忘れることはないでしょう。

47. 桜の花咲く季節

撮影：昭和29年４月

ものいわぬ草木も、めぐり来る季節ごとに花を咲かせて人間社会に季節を教えてくれます。美しさを誇るかのように咲く華麗な花、よく見ないと見落としてしまいそうな道ばたに咲くかれんな花、花にもいろいろあるけれど、私達日本人にとっては桜の花が一番親しみやすいのではないでしょうか。またこの季節が私達の気持ちを一番良く引き立ててくれるようです。桜の花と人とは古来より強いきずなで結ばれています。散りぎわを武士と結びつけた言葉や、人々の行動を戒めた言葉など数限りなくありますが、やはり桜の花の季節が来ると自然に心が浮き立つようです。またこの季節には色々な行事が催されます。この写真は野点の一コマ。

茶道の心得のない私にも風雅ゆかしきものとの味わいを楽しみました。

48. 苺露地栽培の当時

撮影：昭和29年５月

麦の穂が出ました。あと１か月たらずで収穫が始まります。そして忙しい田植えの季節がやってきます。苺の収穫は五月初めから麦の収穫までの短い期間に行われます。取りたての水々しい苺を出荷するために朝早く収穫します。おばあさんも子どもも朝ごはん前にお手伝いです。苺の露地栽培がはじまったのは県東部では富士市に次いで裾野（当時小泉村）でした。環原、水窪地区の先進農家によって栽培が始められました。

しかしあのころは、木箱に苺を一つ一つ升ベラを使って上手に箱詰めしないと輸送中に荷傷みがして売りものにならないので大変でした。富士山の高冷地育苗、ビニールトンネル栽培と裾野で開発し、栽培地は茶畑から久根、公文名と移行し今も少数ながら栽培されています。

49. 宗祇法師をしのぶ

撮影：昭和29年４月

室町時代中期の連歌師宗祇は、「竹林抄」や「新撰菟玖波集」などの連歌撰集の編集をしたと言われ、この宗祇法師の墓が市内の桃園にあります。古老の方に聞いた話によると、桃園山定輪寺は現在の位置より西寄の山ふところにあったといわれ、法師の墓はその定輪寺境内にあったものです。知人を介して竜沢寺のお坊さんに来駕していただき、法師の墓におまいりをしてくださるよう御願いしましたところ、心よく承諾してくれました。

名まえは忘れましたが、竜沢寺の内でも偉いお坊さん一行が７人で来てくれました。早春の墓参の一日でした。いまは開発のため、この墓地も移転して現在の定輪寺境内にあります。

50. 懐かしい十里木分校

撮影：昭和33年６月

昭和29年に須山小学校は全焼し、中学校の一部も焼失したが、翌30年には須山小中学校新築校舎が落成した。本校は災難にあったが、ここ十里木は静かな平和に明け暮れていた。昭和32年には須山村が富岡村と共に裾野町へ合併したが、この頃の十里木はバスも通わない陸の孤島といわれていた。しかし、東海道が出来る以前は街道筋で伸々のにぎわいであったと古文書に記されている。

戸数15戸、全校生徒11人、十里木分校の姿でした。いまは分校の校舎もなく生徒は須山小中学校へバス通学をしています。人里はなれた十里木も今は、富士急の開発による別荘地、日本ランド遊園地、大昭和開発の寮荘、ゴルフ場、富士サファリパーク等々一大観光地としてにぎわいを見せています。

51. 田植の頃の幼な子

撮影：昭和31年６月

戦後の一時期は食糧難であったため、食糧の増産と米や麦、甘藷の供出などで農家は大変忙しい毎日であったけど、反面農業の花形時代でした。この頃の農家は忙しくても経済的に恵まれたので、働き甲斐がありました。私も戦後北支から引き揚げ者ですが、実家に身を寄せてしばらく農業をやりましたが、何を作っても庭先で売れた時代でした。戦前の農家はみじめでした。私の家などは水のみ百姓で、働いても働いても借金に追われていました。田植時期になると妹をオンブして学校へ行きました。小学校５年生の頃は、田植の時期中毎日縄張りをして手伝いをしたものです。この写真を見ていると、幼い頃が想い出されるのです。何かを訴え、大人に対して抗議したいようなそんな顔に見えます。

52. 竹細工の盛んな頃

撮影：昭和30年7月

現在、竹製品といえば、名工といわれる茶畑の芹沢さんが作る竹細工品のように、民芸品的に扱われるようになり、観光地に行くとみやげ物店に民芸品のみやげ物として売られています。戦後、産業の目ざましい発展によりプラスチック製品が出現しました。この以前は、竹製の容器は生活必需品として欠くことのできないものでした。農作業に用いられた笹類、お勝手用のざる、ご飯びつから弁当びつにいたるまで、雑貨屋さんには竹製品が山と積まれていました。これらの竹製品はカゴ屋さんで作るだけでなく内職として一般家庭でも作られていました。

単価が安いため量産しなければ収入は少ないので、暑いときも寒い時期も、手の荒れにも負けず一生懸命に作業していた姿が思い出されます。

53. 自然は偉大で恐ろしい

撮影：昭和33年7月

うっとおしい雨空の続いた梅雨も、ようやく明けてやれやれと思ったのもつかの間、カンカン照りの夏が一気にやってきた。初期生育の良かった陸稲も、耕土の浅い畑では早くも葉枯れが見えはじめついには枯死する株が目立って多くなってきた。農家では、辛うじて生きている株を、枯死株の少ない畑に移植したり、水をかついで運搬しかん水して一生懸命に手をつくしたが、焼け石に水のありさまで、ついには全滅の畑が続出した。

やっと生き残り出穂を見た陸稲も白穂が多く、この秋の収穫は少なかった。

農家の人々は、自然と共和しながら、自然との戦いを続けて汗を流します。それでも報われないことも…。

この年、狩野川台風が来襲し、伊豆地方に大被害をもたらした。

54. 農家の働きもの

撮影：昭和29年8月

「ホラ・ホラ・ちょっと待ってよ。ベエちゃんもお腹がへったか知れないけどお姉ちゃんも腹ペコだよ。わかったよ、いまやるからネ」と牛と話しながらの娘さん、暑さにもめげず田の草取りに励む、いまは昔ばなし。現在の農家では、娘さんが田や畑に出て働く姿などほとんど見られないし、牛や馬の姿も見られなくなった。

この頃の農作業は、全部手仕事であったから牛や馬は唯一つの原動力であり家族の一員として可愛いがっていた。牛もよく家族になついていたものですが、いまは畜産農家にしか見られません。

あの頃の農業は、人手がいくらあってもたりないときでしたから、娘さんは勿論、学校へ行っている子どもまで農作業の手伝いをしました。ほんとうに昔の話。

55. 真夏の田園風景

撮影：昭和33年８月

田植のあと、一番、二番の田の草取りも済み農作業も一段落です。

今日も朝からギリギリと真夏の太陽は容赦なく照りつけます。定期的な農作業が一段落したとはいえ、こんな暑い日でも農家の人々は休んではいません。野まわり（田の見廻り）をして日干し、水かけの手配り、くろ刈り（田の畦の草刈り）等々、でもこの頃は猫の手も借りたい忙しさではないのです。なのに猫も犬もお手伝い？　お母さんと娘さんのあとについて犬も猫もやってきました。犬は「この暑さではたまらないよ、参った、参った」という表情。猫はこれを見て「ニャンともまあ……それを夏のヤセ犬と言うんだネ」そんな会話がきこえるような、お母さんと娘さんはさて何を話しているのかな。真夏の田園風景。

56. 中駿大同団結の日

撮影：昭和32年９月

昭和27年４月１日、小泉村、泉村が合併して裾野町となりました。日米行政協定の成立、保安隊の発足がこの年でした。昭和31年９月30日、深良村が裾野町へ合併しました。御殿場線にディーゼルカーが運転開始されたのがこの年です。昭和32年９月１日、富岡村、須山村が裾野町へ合併して中駿五ケ村が一つに団結しての裾野町の発足となりました。この年にソ連が人工衛星の打ち上げに成功しています。

写真は、合併祝賀式典の一場面、万歳の表情にも喜びがあふれていました。

長い年月、中駿五ケ村の行政を担当して、今日の裾野市発展の基礎を築かれた元老の方々の顔がいきいきと輝いて見えます。いまは亡き方々のめい福をお祈りいたします。

57. 愛鷹山登山道調査

撮影：昭和34年９月

中駿の大同団結による裾野町の発足で商工会も活動を開始しました。また地域社の活性化を図るためにも、観光協会の設置も必要になりました。町経済委員会、商工会の関係者が中心となって観光協会設立に努力しました。

こうした経過の中にも実践活動は始まりました。旧須山富士登山道を復活するための登山道調査、愛鷹山登山道の現況調査、動物、植物などの調査等、足を使っての調査が活発に行われました。

写真は、愛鷹山呼子岳の頂上での一服風景です。皆さんこの頃はまだまだ元気旺盛で終日歩いても疲れを見せなかったものです。こうした調査を繰りかえし行って、登山道の整備や、アシタカツツジ原生群落の保護指定等につながってきたものです。

58. 郷土の生んだ政治家

撮影：昭和33年９月

郷土の誇る政治家故遠藤三郎先生が、建設大臣に就任されて晴れのお国入りをされたのは、昭和33年夏の頃でした。

その年の春まだ浅い頃、先生が入閣するかもしれないという話が秘書の方より入り今か、今かと待ちわびたものです。いよいよ組閣の日の朝建設大臣の報が入りました。その日裾野町は喜びに湧き立ちました。

お国入りの祝賀会は西小学校校庭で開催されました。喜びと大臣の抱負を語る先生の顔は勿論、富岡地区の皆さんの顔は殊のほか輝が高く見えました。

59. 裾野市の基礎を作った人々

撮影：昭和32年10月

昭和32年９月１日、須山村と富岡村が裾野町に合併して中駿五ケ村の大同団結ができあがりました。この写真は、その当時の裾野町町議会議員の先生方です。

すでに故人となられた先生も半数を数えますが、肉親の方や親戚の方々、恩人と尊敬する方、知人、友人と市民の皆様の中には非常に懐かしい想い出の姿ではないでしょうか。

中駿五ケ村合併の推進、工業立町とする企業誘致、観光資源の発見と観光開発、道路網の整備、教育施設の充実、福祉行政等々、情熱を燃やした先生方の顔が印象強く目に浮かびます。

60. 今は見られない秋祭りの山車

撮影：昭和31年10月

「ピーヒャラヒャラピーヒャラ、ドンドンツクツドンツクツ、チャンチキチチャンチキチ」秋祭りの笛、太鼓、鐘の音が聞こえてくると、貰った小遣いを握って祭りの夜店に駆けて行った子どもの頃を思い出します。秋祭りの最後を飾るのは二本松（佐野上町、緑町、元町）の浅間神社のお祭りで、山車が出て賑わったものです。今は交通関係で山車が出なくなり秋祭りも一抹の淋しさをおぼえるのは私だけでしょうか。

テレビでは、各地でお祭りの催し物が色々と盛大に復活していることを報じているこの頃です。

61. 椎茸の植菌作業

撮影：昭和30年11月

この当時、岩野町ではきのこ類の人工栽培を計画し、まず椎茸とマッシュルームの栽培を推進指導していた。

マッシュルームは、沼津北部高校の藤沼先生が種菌培養のパテントを取られたので、先生について教えを受けた。

椎茸は、椎茸研究の権位者である広江博士に師事し、11月から3月にかけて発生させる促成栽培を習得したので、この技術を普及指導していた。しかし、岩野の農業はなんでも栽培できる面があって、残念ながら産地化には至らなかった。

しかし、深良と今里には大大的に栽培し成功している方がいます。

62. ヒッパリッコ

撮影：昭和30年12月

戦後10年、食料事情も徐々におちつき、経済復興のきざしも見えてきた頃でしたが、子どもたちの遊び道具にまでは手が届かなかったのでしょう。今は、オモチャ屋の店には木製からプラスチック製電気製品等、ありとあらゆる玩具が並んでいますが、この頃はせいぜいゴムマリくらいのものでした。それでも子どもたちは元気で健康で、子守やできる範囲のお手伝いをしながら、子どもたちで遊びを見つけて朗らかに遊んでいたのです。

もうすぐお正月、さて何を買ってもらうのかな、マリかな、服かな、それとも靴かな。

63. 帰　　郷

撮影：昭和31年12月

師走もおしせまって、あしたはモチつきです。お父っちゃんは、オセチ料理やおぞうにの材料に、大根やら里いも、人参などを掘りに行った。

都会に働きに出ている娘は、冬休みで久しぶりに帰ってきた。でも田舎は正月を迎える準備でおおいそがし、娘の相手になってはいられない。

「久しぶりに山や畑の景色を眺めながらお父っちゃんを迎えにゆこう。」

きっと、こんな場面でしょうね。今はもちろん、馬方も見られないし、こんな山村の風景は見ることのできない一幅の絵でありましょう。

64. 出　初　式

撮影：昭和32年1月

昭和31年9月1日、深良村が熊野町へ合併した。翌年の消防出初式は熊野高等学校の校庭で行われた。

消防ポンプも今昔の感がありますね。たしかこの頃は、自動車ポンプは2台くらいだったと思います。ガソリンポンプが花形、ポンプ操法にも真剣そのものです。ガソリンポンプは、人力で引いて火事場へ走るのだから、消防手はとても大変だったのです。

今は、消防署が設置され常設消防士が活躍してくれますから、市民は枕を高くして眠ることができます。

65. 岳麓に見る牛馬力

撮影：昭和30年2月

このあたりでは、昔から馬車とは言わず馬力と言っていた。馬に引かせる荷車だったから馬力と言ったのでしょう。発動機は何馬力と言われます。昔は、馬が動力源の最たるものだったのでしょう。

戦中は、農耕馬も軍用馬として軍隊に徴用され少なくなってしまったので、馬の代用として役牛を使うようになったのです。牛は温和で女、子どもにも使えたので馬ほどの能率はあがらなかったけど重宝がられました。

牛が引く車は、牛馬力と言い、馬力より少し小型にできていました。

66. ーぷくするおじいちゃん

撮影：昭和29年1月

地位も、名誉も、名もいらず、ただ一心不乱に働き続けて70余年、今年の秋はお子さんたちが、赤い帽子にチャンチャンコを着せて米寿の祝いをしてあげるとか言っていた。煙草入れ、キセルを持つ手指は大きく力強くまだ若々しくさえ見える。

仕事の合間の一服はいかにもうまそうで、吐く煙りも力強い。晩星霜を野良仕事一筋に生きた人生は、語らずともその風貌に出ているようで、野良着姿がよく似合うおじいちゃん。私の父も90歳で亡くなりましたがどこか似ているように思い出すのです。

67. あの頃の農業近代化事業

撮影：昭和34年３月

富岡地区の演習場に隣接する農耕地は大面積があり、陸稲や豆類、とうもろこしなどが栽培されていた。ことに北部には水田がなかったので、陸稲は大事な作物であった。しかし、この地域の表土は黒ボクといわれ、その下は富士マサと呼ばれる不透水盤層があって水を通さないため、長雨や日照りの災害を受けることが多かった。昭和34年新農村事業の指定を受け、大型農用ブルドーザーを導入して深度１メートルの富士マサを破さいし優良農地の造成を行い関係住民に喜ばれた。しかし今はトヨタ、関東自動車の企業用地となっている。

68. 山羊といっしょに

撮影：昭和33年３月

「アレアレ駄目よ、そんな方へ行っちゃ駄目よ、もっとゆっくりまっすぐ歩いてよ、ホラホラ車がぶつかってしまうじゃないの」。農家では自家用の乳をしぼるため乳牛を飼っていない家では山羊を飼っていました。

嫁さんが仕事道具を車に積んで野良仕事に出かけます。山羊には新芽の出てきた草をたくさんたべさせようと、いっしょに野良へ連れていきます。

おじいちゃんは、日向ぼっこをしながらかわいい孫娘の仕ぐさに笑いかけます。小春日和ののどかな山村のほほえましい風物詩。

69. 彼岸過ぎての麦の肥

撮影：昭和32年３月

その昔、日本陸軍の兵士がかぶった戦闘帽を格好よくかぶり、手拭いを首に巻いて、まさに農業戦士、老兵は死なずただ働くのみ、といったいで立ち。ガタガタしたってしょうがないネエ。一服やるベエ、エヘヘヘエ……。腰から引き抜いたタバコ入れ、ネセルの箱の割れたところに絆創膏を巻いたところなど当時を彷彿とさせます。「彼岸過ぎての麦の肥」だからな遊んじゃあいられネエヨ、と笑っていた。麦作は彼岸過ぎてから追肥をすると、おそ出来がして減収するとの意味なのです。このおじいさんいまも元気でいるだろうか。

70. 旧裾野市役所の庁舎

撮影：昭和35年３月

昭和27年小泉村、泉村が合併して裾野町となった当時の役場庁舎は、それまでの小泉村役場（現在聖心幼稚園の所にあった）を使用していたが、非常に狭小な建物だったので裾野町役場として新築したのがこの庁舎です。

この庁舎も、昭和31年深良村が合併し、さらに昭和32年富岡村と須山村が合併したことにより手狭となったため３階を増築しました。この写真は３階増築前のもので、この写真を撮影した時は市民会館の建設中で、屋上のコンクリート打ちがおこなわれていた時で、その屋上に登って撮影したものです。

71. 田園の一隅で

撮影：昭和33年５月

戦後11年を経たこのころは、ようやく衣食住も豊かになりつつあって、前途が明るくなってきたころです。

この前年、富岡村、須山村が合併して中巻５か村が団結一丸となり、現在の裾野市繁栄の基礎ができあがった年です。

裾野町とは言っても、私の住んでいる所など片田舎の一隅でしかありませんでした。写真左上に見える屋根が私の家ですが、最近の豚舎の方が立派ですね。

でも、小さな畑には麦の穂が波を打ち、菜の花も咲き、苗代の苗も伸びてとてものどかに思いだされます。この年狩野川台風で伊豆地方は大被害を被った。

72. 田植、掛け声が聞こえるようだ

撮影：昭和30年６月

当時の田植は大きな掛け声で作業をするにぎやかなものでしたが、作業順序は掛け声によって進行するのです。最初は田を横に代をカク、これを一鍬という。次は縦に代をカク、これを交互に二鍬、三鍬と代カキをする。掛け声は一鍬目がヨンヤサ、二鍬目はタイギダ、三鍬目はカイダセ、四鍬目がオシキレ、五鍬目はハンヨダ、六鍬目はカイコダ、最後の鍬はナラセヨ、で終了する。一鍬から三鍬目までは鼻取りは歩く行を細かくし、代カキは力強くマンガを押し三歩押したらマンガを上げ、また押す。四鍬目のオシキレではマンガを上げずに押し切る。ハンヨやカイコの鍬では鼻取りは荒目に歩き、代カキは高目の所を低目の所へわずかに押す。ナラセはマンガでザブザブするようにして終わる。

73. 大畑橋の今昔

撮影：昭和37年５月

この橋どこの橋かわかりますか。昭和10年代以前生まれの人たちには思い出の深い橋、時代劇映画のロケにも度々撮影された懐かしい木橋の大畑橋でした。昭和31年７月23日の台風集中豪雨で危険にさらされ、警戒についた町職員（現水道部長古谷さんら）の見守る中でアッと言う間に流出、この写真は流失１時間ほど前の撮影によるものです。昭和37年５月新しい大畑橋がようやく完成して経済文化の交流発展に大きな役割を果たしてきましたが、時代の流れに即応して昭和63年度には新しい橋にかけ替えられるそうです。

74. 町民会館落成式典

撮影：昭和34年８月

昭和34年といえば、皇太子さんが正田美智子さんとご成婚の年です。国民こぞって祝福しました。しかし悪いこともありました。伊勢湾台風が上陸して甚大な被害をもたらしました。安保改定反対デモ隊が国会構内に突入して騒然をさわがせました。

桧野町民にとってはおめでたい年となりました。それは、待ちに待った町民会館、公民館が落成したのです。中験５ケ村が合併したものの、行事があっても寄り所がなく、庁舎の屋上で済ませたものです。落成式のこの日は晴れ晴れとした顔が新しい町民会館一ぱいに見られた。

75. 合併祝賀式典

撮影：昭和32年９月

昭和32年９月１日富岡村、須山村が桧野町に合併し中験５ケ村の大同団結が実現した。23,000人の町民は心から歓喜して合併発足祝賀式典を挙行することとなった。この祝賀式典は各種団体、町民こぞって盛大に開催された。式典は東小学校で行われその席上、町章制定のため公募された入賞者の表彰も行われた。また全世帯に町章染め抜きの手ぬぐいを１本ずつ配布、小学生、幼稚園、保育園児には打ち菓子を１箱ずつ贈った。催し物は、商工会による花火100発の打ち上げ、小学生児童の旗行列、青年団による演芸大会、駅前広場では山車のシャギリ、婦人会による踊り、県東部相撲大会等々が催され町民の喜びは一入感銘深いものがありました。

76. 観光資源調査の一行

撮影：昭和35年10月

この年は、日米安全保障条約の改訂に調印され、この改定に反対する運動が激化したり、浅沼社会党委員長が刺殺されるなど物情騒然としていたころです。

裾野町では、町議会議員と観光協会役員が合同して将来の裾野町発展のために、工業立町と併行して観光開発を進める計画を立て、まず観光資源の調査を開始しました。町内はもちろん、東は箱根山の神奈川県境、北は富士山の御殿庭、西は愛鷹山等々くまなく踏査しました。箱根山の芦ノ湖スカイラインは工事中だったので大変でした。山伏峠で一服、今は亡き人もおり懐かしい想い出です。

77. 竹カゴ屋さん

撮影：昭和32年11月

店頭にいっぱい並んだ竹製品。木の葉籠、竹ほうき、こまんどらい、市場籠、目籠、背負籠、農家にはなくてはならないものでした。農家はもちろん非農家、一般家庭にも絶対必要な笊類、大笊からコンボイザル、味噌こし、セイロ等々、メジロカゴも見えます。

朝夕の野回りには木の葉籠を背負い、鎌を持って行く。水の掛け引をしながら土手の草を刈り籠につめて帰る。馬や牛のえさです。このような懐かしい竹製品も現在は化学製品に代わり、竹かご屋さんもなくなり、裾野市内でも2、3軒を残すだけになりました。懐かしいですね。

78. 裾野市の発展を築いた政治家

撮影：昭和34年12月

昭和34年も師走を迎えたある1日、裾野市の偉大な政治家2人が対談しました。岩崎亀さんは昭和22年4月1日静岡県議会議員に当選以来、6期24年間を歴任して昭和46年3月退任。昭和47年1月10日裾野市長となり、昭和51年1月退任されました。市野昇さんは泉村当時から村議会議員を勤め、裾野町となってからも町議会議員、市議会議員を続けて議長を昭和30年7月から31年2月までと、33年10月から37年10月まで歴任されました。

この日は、裾野市の将来についての抱負を語り合っておられました。

79. 裾野町役場職員 元旦の思い出

撮影：昭和33年元旦

昭和32年9月1日、富岡村、須山村が裾野町と合併して中駿の大同団結が成されたのですが、この写真は翌年の昭和33年元旦の記念写真です。この美男美女は当時の町役場職員（有志）の晴れ姿です。場所は役場庁舎（現在の勤労青少年ホーム）の屋上です。現在市役所職員は年賀の式を行っているかどうかは存じませんが、この頃は三役以下全員が登庁して年賀の式を行いました。毎日見慣れている顔もこの朝は別人のよう。現在市役所に在職している方は丁度半数で部長、次長クラスですね。お元気で市民のために頑張ってください。

80. 思い出の政治家

撮影：昭和32年2月

（上）杉山識恵氏
（右）渡辺義夫氏

思い出の方々、裾野市の元老とも言うべき偉大な人です。渡辺義夫さんは昭和31年4月30日2代目裾野町長として就任、昭和34年12月20日退任するまでの間町政を担任されました。この間31年9月には深良村が合併、32年9月には富岡村、須山村が合併されました。

合併後の煩雑な町政を担当されたのです。今も元気で社会のために尽力されておられます。

杉山識恵さんは既に故人となられましたが、泉村、小泉村が合併した昭和27年5月31日初代裾野町助役に就任、昭和35年5月20日退任するまでの間、初代藤原重治町長から3代目小林秀也町長の女房役として尽くされました。その温和な人柄が今も目に浮かびます。本当にご苦労さまでした。

81. 市民スポーツのはしり

撮影：昭和35年3月

これは、石脇区の健民運動会の一コマです。故人となりましたが、時の石脇区長大庭忠治さんの提唱によって健民運動として区民総出で運動をすることになりました。市民スポーツのはじまりであり現在提唱されているコミュニティづくりの元祖とも言うべき運動会です。グラウンドは稲を刈り取った跡の田んぼ。3月とはいえ外はまだ寒い早春の日射しを浴びて、モンペ姿にカッポウ着、顔に汗して真剣にバレーボールに取り組んでいたご婦人たち。現在はバレーボールも盛んになり体育館で行われておりますが、しみじみと今昔の感がしのばれます。

82. 懐かしい十里木の顔

撮影：昭和35年３月

懐かしい顔が並んでいます。若々しくて溌剌としていました。十里木の顔です。27年前の十里木のご婦人方です。十里木には水がなく、領朝の井戸と言われた井戸が唯一の水源で、この井戸から水を汲み上げ肩にかついで各家庭に運んでいたのですから、水は非常に大事に使用していたものです。昭和35年４月待望の水道が完成しました。この時の十里木の方々の喜びは大変なもので子どもたちは蛇口を開けては水が出た出たと大ハシャギでした。この日は、水道完成祝いの支度をするので、うれしい顔がそろったところで一枚はいパチリ。

83. 柳端橋の竣工式

撮影：昭和35年５月

昭和31年７月23日この地方を襲った台風は物凄い豪雨を伴って吹き荒れたため河川は氾濫し、大畑橋や柳端橋などいくつかの橋が流失した。それから４年昭和35年５月柳端橋が竣工した。写真は竣工式の模様の１コマです。既に故人となられた当時の町長小林秀也さん、助役の杉山義恵さん、議長の市野昇さんなど懐い出の方々が列席されて、小林町長さんがテープカットをされました。

山は、農耕地が多く見えます。左上には深良小学校の校舎が見え、国道246号線をトラックが１台走っています。のどかな田園風景の中で式典が行われました。

84. アシタカツツジの現地調査

撮影：昭和37年５月

昭和36年春、米国植物導入局のクリーチ博士（理学博士、野生ツツジの権位者）が日本の野生ツツジを調査のため訪日して、愛鷹、富士山麓を調査された折アシタカツツジについて「眠れる山の宝」と絶賛された。町では、昭和37年県農業試験場に依頼してこの地域に対するアシタカツツジの学術調査を依頼した。この調査団は県農試場長河合博士、同農試篠原博士、船越技師、村松技師、杉山総務部長の諸先生により実施された。この調査報告は紙面の都合上記述できないので、またの機会に記述しますが、写真の中央の方が調査団長の河合博士です。

85. 七夕豪雨を省みて

撮影：昭和31年7月

昭和33年伊豆地方を襲った狩野川台風は前古未曽有の大被害をもたらせたことは多くの人たちは記憶していることと思います。幸い裾野地方はあれほどの被害を受けたことは無いと言うものの、台風による被害はすくなからずあります。

昭和31年7月23日の七夕豪雨は、黄瀬川の氾濫を招き、大畑橋や柳端橋をはじめ多くの橋が流失しました。黄瀬川から導水している富沢堰は、水門が木っ端微塵に破壊され大被害を受けたのです。この路道および堰も2億2千余の巨大な事業費が投下されて立派な堰となりましたが、「災害は、忘れたころにやって来る。」と言われています。災害のおこらないように注意を怠らないようにしましょう。

86. 耕うん機けん引車に軽免許が必要

撮影：昭和36年8月

戦後15年、この時代は裾野地方農業の最盛期と言える時代でした。ほとんどの農家で耕うん機を所有していました。しかも農耕用の耕うん機にけん引車をつけて運搬用にも使用されるようになり、馬車、牛車は姿を消しました。こうして一般道路を耕うん機けん引車が通行するようになると交通上の危険が伴うので、交通法規が改正され、昭和36年11月から軽免許が必要となりました。農協では、農業者に軽免許を取得させるための実地講習会と取得試験を現地で行っていただくよう警察署にお願いして実現することになり、各地区ごとに小学校の校庭を借用して夏休み中に実施することになりました。

この写真は富岡地区の免許取得実施試験の1コマです。

87. 婦人会の視察見学の思い出

撮影：昭和36年9月

昭和32年9月1日、富岡村、須山村が裾野町に合併して、文字通り中駿大同団結が成りました。戦後の急速な復興による国民生活の合理化、高度成長をふまえて、町は昭和35年に工場誘致条例をつくり、工業立町をめざしました。そのトップをきって矢崎電線工業が昭和36年設立、37年には三菱アルミが着工しました。このころトヨタ自動車工業の誘致が始まっておりましたが、地権者の理解を得るには長い日時がかかりました。

婦人層の理解を得るために、トヨタ自動車工業の会社見学が企画され、バス5台に分乗視察を行いましたが、帰途浜松市にある航空自衛隊浜松基地の見学も、この計画に盛り込まれていました。飛行機に触れたことなどない人たちがほとんどだったので、見学時間も延び、感激もひとしお深かった様子でした。

88. 観光資源開発調査の記念写真

撮影：昭和35年10月

惜楽園は茶畑滝頭にあり28名共有地だったが、昭和33年共有より裾野町に遊園地とするため無償貸与されたので、町は遊歩道や休憩所を整備し遊園地とした。

園内には不動の滝があり、高さ10mから流れ落ちる景観はすばらしい。

当時裾野町は工業立町とあわせて、観光資源の開発にも力を入れ、昭和35年には町内（現市内）全域にわたり観光資源の調査を行った。

写真は、惜楽園案内板の前で記念撮影、当時の町議会経済委員および観光協会役員の方々で、現在既に半数近い方が故人となりました。懐かしく思われます。

89. カヤギ刈りのころ

撮影：昭和27年11月

カヤギとは、手入れがよく届いていない、山林や林道沿いや沢沿いなどに生えている竹笹のことです。昔（戦前）の農家では、秋の取り入れ、麦まきが済むと、モヤ切り（タキギ取り）や落ち葉かきをします。落ち葉かきをするのに、まずカヤギ刈りをします。このカヤギは、農家にとって利用が多く、たい肥小屋の囲いや屋根に、風よけ垣に、または麦性作物の支柱などに利用したものです。この娘さんは、炭釜の火入れのほ火用にするために、カヤギ刈りをしていました。写真で見るとは大違いで、きれいな顔や首筋などはバラ掻きになり、大変に重労働で嫌な作業でした。

90. 農業視察研修の思い出

撮影：昭和33年12月

戦後農業の大革命だった農地解放も軌道に乗り、混乱した食糧難もようやく落ち着き、戦後の農政を支えた農地委員会、食糧調整委員会は解消して総合農政を目的として農業委員会が誕生したのです。

当市においても昭和32年中農大同団結による裾野町の誕生により農業委員会も裾野町農業委員会になりました。このようにして農業委員会は農地法によるものと農政を扱うことになったのです。

これは、今後の裾野町農業の発展を如何に進めたら良いかの研究のため静岡県農業試験場を訪問視察研修の折の記念写真です。思い出の懐かしい顔ぶれです。

91. 岳麓の美人の思い出

撮影：昭和30年1月

よく古老の言われた例えに「富士山の見える処に美人はいない」と言われましたが、これは世界に比類の無い富士山の美しさを強調する例え言だと思います。

広報すその愛読者の皆さんはこの写真をご覧になってどのように感じられたことでしょう。戦後10年を経たお正月，まだまだ満ち足りてはおりませんでしたが，清潔で溌剌とした笑顔でお正月を祝う様子は質素ながらも、パックの深水画伯の描く日本美人とほんとによく似ていると思いませんか。時代は違っても古来より伝統の日本美人の真の美しさが見る者に心の安らぎさえ感じさせます。

92. 農技連のメンバーたち

撮影：昭和34年2月

昭和32年9月1日、須山村と富岡村が裾野町に合併して中裾5ケ村の大同団結がなされたのですが、当時の産業はなんと言っても農業中心でした。米をはじめすべての農産物は増産の掛け声にあおられていた時代です。町の経済課勤業係と農協の技術員との構成で「裾野町農業技術指導協議会」が設置されて農家の人たちの指導に専念し、数々の業績を挙げました。県主催の堆肥増産共進会に富沢部落が優勝、春の高冷地育苗による促成栽培、芝栽培を農作物に編入、つつじの年内開花早咲き栽培に全国で始めての成功、ぶどう巨峰の栽培やプリンスメロンの栽培を導入等々農家経済の向上と安定に尽力したものです。皆さんにも馴染みの深い当時のメンバー、いい男ばかりでしょう。左端のベレー帽が筆者です。

93. 懐かしいキウイのハウス育苗

撮影：昭和33年3月

産業の技術革新に伴い農業技術の発展も著しく、皆さんは既にご承知のようにハイテク技術によって農産物の栽培も工場化して企業生産がなされつつあります。しかし、あのころの農作業が懐かしいですね。こんなこと言ってると年齢がわかってしまうけど、当時このような作業を3月初めにやっていた農家は篤農家だったのです。ビニールハウスの中で2月上旬に播種3月上旬移植育苗3月下旬ハウス内定植4月下旬から収穫市場出荷という栽培形体で、より多くの収入を上げ得た農家です。親子夫婦揃っての作業がうらやましく、また、懐かしくしのばれます。

94. 十里木共同給水施設の竣工式

撮影：昭和35年4月

広報すその昭和62年4月15日号「ふりかえる裾野」82号に掲載した“十里木の縁人たち”で紹介しましたが、十里木には水道がなく、頼朝の井戸と言われた1つの井戸に頼っていました。裾野町に合併した当初の事業として水道の施設を計画したのですが、少数人員のため水道の布設は不可能でした。他の方法を色々と検討したところ、山村開地共同給水事業を採用していただき補助事業として実施したのです。昭和35年4月待望の水道が完成しました。これは竣工式のスナップですが、ブナ原生林の十里木公園で喜びの竣工式を挙行したものです。

95. いしくのわざ

撮影：昭和33年5月

石工とは、石の細工をする職業の人たちで、いしく、石屋さんと呼ばれます。いしくと呼ばれる人たちがいつの時代に生まれたかは知りませんが、機械のない時代に大工事を世に残した歴史が忍ばれます。大阪城をはじめ、名城の石垣積みなどはその最たるものでしょう。私の父も元は石屋でした。石切場の高い所に登り、命綱に身をゆだねて火薬を仕掛ける穴を掘り、爆破して大きな石を落とし、ケンチという石を切り出して名古屋方面へ送り出していました。谷間にこだまする金槌の音、石切唄が子どものころの思い出に今もはっきりおぼえています。現代社会では、重労働を必要とする職業を希望する若者が非常に少ないと聞いていますが、今後どれ程機械力が進んでも、人の手を必要とする職業は希少価値的職業と言えるのではないでしょうか。

96. 景ケ島・依京寺について

撮影：昭和31年6月

佐野川の上流には、びょうぶ岩から景ケ島上下の300mにわたって溶岩が水食され、奇形を見せる渓谷ですが、景ケ島の中央には依京寺があり西行法師手植の松があり、コケむした石仏や石塔に囲まれている。この当時依京寺の堂は荒れるにまかしていたが、現在は心ある人々の手により幾分か修復されているが、心ない人たちがきてコケむした石仏の顔を持ち去ってしまい、今では顔のついた石仏はほとんどなくなってしまった。

この境内の溶岩にはヒトツバシダが生育しており、植物学上からも貴重なものと言われるので是非とも保護されたい。

97. 黄瀬川の増水

撮影：昭和31年7月

昨年85号にも記しましたように、昭和31年7月23日の七夕豪雨は物凄い雨量で、黄瀬川の増水はいまだ例を見ない程でした。五竜の滝は滝の上と滝壺の落差がほとんどわからないくらいの有り様で、この増水に市内の多くの橋が流失したことは、まだ記憶に生々しく残っております。この写真はあくる日の朝撮影したもので、現在の消防署の裏手低野橋のすぐ上流です。この時点では随分減水してはいるのですが、まだその濁流は目を見張るほどでした。昨年は幸い台風の上陸もなく、被害もほとんどありませんでしたが、今年も平穏であることを祈ります。

98. 下刈り競技大会の思い出

撮影：昭和31年8月

外国材の輸入が多くなるにつれ、我が国の林業には多大の影響を与えました。熊野地方の山林は、零細面積と林道の未整備という悪条件により、立木を買う業者はいなくなってしまいました。このため山林育成の意欲がなくなり山は荒れる一方で、有った道さえも通行不可能の状態になっている始末です。

ふりかえれば、このころは山林育成に熱心でした。県でもこれを奨励して「山林育成下刈り競技大会」を富士宮市榎原山地で開催することになり、各地区から選手が選抜され、中郡地区からは茶畑グループが出場しました。それはそれは猛暑の日で、絶え間なく流れ出る汗をぬぐう間もなく、大きな鎌を振るって健闘しました。今は昔の思い出です。

99. お年寄りとの語らい

撮影：昭和30年9月

今年も敬老の日がきました。私も、70歳老人の仲間入りという年齢になりました。今は、食生活がよくなったせいか、それとも重労働が少なくなったせいか、あるいは健康管理が向上したせいか、とにかく人間の寿命が延びて、平均寿命80歳代となりました。しかし、昔の人たちだって喜寿・米寿の長命の方たちも少なくなかったのです。私の祖父は85歳、祖母は83歳、父は90歳の長命でした。長命のお年寄りの風貌は、本当にいいですね。目だりやほほに刻まれた深いしわ、年輪を重ねた歯・あご。いかにも年の功を思わせます。もっともっと長生きをしてください。

100. 大野原所見

撮影：昭和33年10月

「さすが、大野原ってヒレエナア、このへんはナ、チャンバラの撮影がよくあるんだとヨ、カッタルクネエカ、一休みするか、ボウズまだ腹あヘラネエカ。」こんな話し声が聞こえる初秋です。今日は久しぶり親子そろってのピクニック、そのいでたちがいいですね。おかあさんの肩にかついだバスケットの中にはどんなご馳走が入っているのかな。肩から下げたおとうさんのカバンには何が入っているんだろう。用意万端コウモリまで用意して、この親子にはきっと良い日の楽しい1日を過ごすことができたでしょう。

101. 運搬具の移り変わり

撮影：昭和35年11月

昔の農家の運搬具と言えば、人力で引く荷車、馬に引かせる馬車、役牛に引かせる牛車があったが、馬車・牛車とは言わず、馬力・牛馬力と言ったものです。戦前は牛馬力などほとんどなく、馬力が主力で、このため農家には1戸に1頭の馬が飼われていたものです。この馬に代わって、役牛が登場したのが戦後です。役牛は馬に比べて温和のため、女・子どもにも扱いやすいことと、馬が不足して入手が困難になったためです。しかし、役牛は動作や歩行が遅いので、大農家は馬を入手し、馬力を使用したものです。こうした運搬具も、現在ではほとんど見られなくなりました。

102. 十里木の今昔

撮影：昭和32年

昭和29年須山小学校が全焼し、同中学校の一部が焼失しました。しかし、翌30年には早くも須山小・中学校新築校舎が落成しました。十里木部落は、須山本村より約6kmも遠く離れた山の上にあったため、ここには分校が建っていました。部落の戸数11戸、したがって分校の全校生徒は、写真で見るこれだけでした。昭和32年須山村は裾野町と合併したのですが、このころもまだ十里木は陸の孤島などと言われていました。

今では、別荘地、ゴルフ場、遊園地、サファリパークなど一大観光地となり、また工業団地も加えて注目をあつめています。

103. 新年初仕事の日

撮影：昭和33年１月

小春日和の暖かい正月でしたが、妙な図柄の写真になりました。

昨年（昭和32年）９月、宮崎村と須山村が裾野町と合併して中駿五か村と言われた谷間の小さな村々が合併して大きな裾野町ができあがったのですから、明けて昭和33年の正月は穏やかなよい正月を迎えました。

この日正月４日、この地方の農家では新年初仕事の日です。この日は、仕事を早じまいして仕事の成果に白カシの枝を立てて、豊年満作を神様にお願いしたものです。場違いな神様へのお祈りが一つ余分に加わりました。

104. 十里木氷穴とその利用

撮影：昭和35年２月

神秘とでも形容したいような暗黒の中の光、時来に向かって光明を射充するかの鮮烈さ、鈴の穂先を思わせるするどい光の変化、この神秘と冷たさと寒さにおもわず身震いをするここは十里木高原の氷穴。

当時は、この氷穴を利用して農業の先端技術の試験が行われました。水仙、アマリリス球根の冷凍による開花促成、都わすれの苗冷凍貯蔵による開花促成、夏菊苗の冷蔵による開花促成等々の試験が行われ、それぞれの大きな成果があげられました。これらの努力が現在の農業技術にみな生かされているのです。

105. 懐かしい町役場職員

撮影：昭和35年３月

昭和35年は、故小林秀夜氏が１月10日裾野町長に就任された年で、須山では、初めて水稲栽培が始まりました。

また、裾野町にボーイスカウトが設立され、カラーテレビの放送が開始された年でもあります。

町役場の職員の皆さんも若かったですね。この方々も、現在は既に故人となられた方も数人おりますし、停年で退職した方も７～８人おります。皆さんの中にも、懐かしい人たちがおられることと思います。いつまでも、元気で頑張ってください。

106. 農場山はどこに

撮影：昭和33年３月

ここは、思い出やなじみの深い方も多いことと思います。私たちの子どものころは農場山といいました。春になると近くの小学校の子どもがたくさん遠足に来ました。道の両側にお茶畑が広がり、あちらこちらに桜の花が咲き、道端にはレンゲ、タンポポ、オキナ草など野の花が咲き、丘の上にはワラビが生え、１日を楽しく遊ぶことができたところです。

今は、宗教団体の経営する高等学校の敷地となり、正面の丘陵地帯はゴルフ場となりました。これも時の流れと言うことでしょうね。

107. 十里木の今昔Ⅱ

撮影：昭和32年５月

全校生徒10人前後の分校ですから校庭も狭小で、山あいの十里木ならではの情趣豊かなところに立地していました。

昭和32年９月１日に掲げられた「駿東郡裾野町立須山小学校十里木分校」の看板が懐かしいですね。哀愁をそそるかのような門柱が心を打ちます。

この日は、どこの青年会だったか忘れましたけれど、お兄ちゃん、お姉ちゃんがおみやげに本を沢山持って慰問に訪れ、スクエアダンスなどを踊って楽しくすごしました。昭和32年５月ごろです。もやが越前岳をかくしていました。

108. 裾野音頭に寄せて

撮影：昭和32年５月

新民謡裾野音頭ができたのは、昭和８・９年のころではなかったでしょうか。よい歌だったので、私たちも盛んに歌ったものです。

富士の裾野に冬３年３月
　　しんは駿河の17むすめ
仇にゃ咲かないヤッコラ山つつじ
（ハヤシ）　トコドッサイ
　　ドッサイナー

この写真の方々は、裾野音頭を踊ったのではありません。多分、合併祝賀の余興に出られた佐野元町の方たちです。この写真を見ながら、裾野音頭を思い出しました。今有志の方々が、この裾野音頭を復活すべく準備を進めているそうです。裾野の市民全部が歌え踊れるように、普及指導をしていただけるよう頑張ってください。

109. 竹林さまざま

撮影：昭和32年6月

これは、何を写したように見えるでしょうか。雪の朝の竹やぶに見えますかね。

昭和30年代私が写真に凝っていたころ葛山の竹林の一角で写したものを、暗室内のいたずらで仕上げたものです。竹やぶというと、暗いイメージが先に立ちます。多分、窪地などに竹やぶが多いからではないでしょうか。そんな暗いイメージを変えてみたかったためです。もっとも、最近では2億余の大金の置き場所となり、大勢の人たちが大金捜しフィーバーで大騒ぎの起きた竹やぶもありましたね。まるで夢のようなほんとの話…。

110. 五竜の滝昔のつり橋

撮影：昭和30年4月

昔の船野音頭の歌詞に「夏の涼みはネー　五竜の滝の　かゝるしぶきに思ひはぬれて　わたるつり橋ヤッコラなつかしや　トコドッサイドッサイナ」

五竜の滝には、つり橋がつきものでしたが、たしか昭和31年7月23日の豪雨、（七夕豪雨）により流失してしまいました。この時は大畑橋をはじめ、佐野川にかかっている橋が何か所も流失したのです。その後大畑橋や他の橋も復旧しましたが、つり橋は長い間復旧できませんでした。今は、立派な太鼓橋とともにつり橋も復旧して、船野市中央公園にふさわしく名勝地の一端を担っていますが、「災害は忘れたころにやってくる」と言われます。十分に気をつけましょう。

111. タバコ栽培のころ

撮影：昭和29年9月

写真のこれはなんだかわかりますか。タバコの葉の選別をしているところです。

食糧難の時代もようやく過ぎて、このころの農業収入の中ではタバコ栽培は高収益を上げたうちの一つだったのです。しかし、その労力は大変なもので、苗作りからすべて専売局の技術指導を受け、指定時期には収穫できる葉の枚数まで登録をしたのです。芽かきのときなどタバコのヤニで作業衣などべっとりになり、あとの洗たくが大変だったそうです。

葉を収穫して1枚1枚縄に差し込み、乾燥庫につるして、寝ずの番で火力乾燥を行う。葉の選別ともなればやれやれです。それでもまだ整理して一時貯蔵をし、専売局から出荷日が決定して検査を受け収納ということになるのです。大変な過重労働でした。

112. 収穫近く

撮影：昭和30年10月

二百十日、二百二十日の厄日も事なく過ぎて、たんぼの稲も稔実期に入りました。この年の豊年を約束されたように、コボレビエを抜く彼女の顔には、健康で明るい喜びがあふれるばかりです。

このごろは、農家の娘さんはもちろんのこと、お嫁さんも田畑へ出て農作業をする姿を見掛けなくなりましたが、このごろの農作業はほとんどが機械化されているので、あまり人手を必要としないのでしょう。経営も兼業農家が多くなり、若い人たちは勤め人が多くなったのも原因の一つでしょう。

かすりの着物にとんぼ笠、あのころの姿が目に焼きついています。

113. ひのきの伐採

撮影：昭和30年11月

裾野市の山林は、国有地を除けばそのほとんどが人工造林地です。しかし、所有地の規模は小さく、山林経営者といわれる人たちは各地区ともに少数に限られています。しかし農家には割地があったので、1 ha以下ぐらいの山林は所有しているのです。人工造林の樹種はほとんどが杉、桧（ひのき）で通常は40年以上を経なければ伐採しないのですが、利用状況により30年ぐらいでも伐採されたものです。

材は皮をはいで屋根をふく材料によく使ったもので杉皮屋根といい、私も戦後引き揚げて来たときは杉皮屋根の家を建てたものです。

114. 輸出用の竹ステッキ材料

撮影：昭和29年12月

裾野地方の竹工業の始まりは歴史が古く、明治41年に始まったと伝えられています。

竹工業といっても真竹やモーソー竹を使ったものではなく笹竹やスズ竹と言われる竹で、竹コウリ、バイスケ、キセルなどが作られていたようです。

竹コウリやバイスケは戦後に至り姿を消し、キセルもキザミタバコが少なくなるにつれてその姿を消しました。

福島竹工業では竹ステッキを作り、アメリカへ輸出していました。その材料の竹は福島県白河方面から買い入れていたと言われています。材料の竹も、加工した竹製品も貨車にて裾野駅で扱われていたのです。

115. 郷土の政治家をしのんで

撮影：昭和33年1月

写真右の建物は、郷土が生んだ政治家の故遠藤三郎代議士が滋津子本浜に所有していた「洗心荘」です。昭和33年正月に帰郷するとの知らせがあり、洗心荘に集合して年頭のあいさつをした時の記念写真です。色々と政治の話を聞きましたが、この時の話では「今度の組閣には入閣できそうだ。おそらく間違いはないと思う」と言っておられました。あれは、2月中旬だったと思います。建設大臣として入閣されたという知らせを受けたものです。

その年の夏お国入りして、西小学校の校庭で祝賀会が催されました。

116. 郵便屋さん

撮影：昭和32年2月

制服、制帽、地下足袋に巻き脚半、肩にカバンを背負い、さっそうと歩いてきます。懐かしい姿の郵便集配人です。愛称は郵便屋さんと呼んでいました。私たちが子どものころの郵便屋さんは、みんなこのような姿で歩いていたのです。自転車が普及してからはみな自転車に乗って回ったのですが、十里木方面では坂道が多く、しかも悪い道でしたから、下りは早いけれど上りは大変で自転車がかえって荷物になったらしいのです。さっさと歩いた方が速いんだよ、と言っていました。バイクは別ですね。

117. 御神木との決別

撮影：昭和30年3月

富沢の産土神をまつる愛鷹神社には、大木の杉が一際大きくそびえていました。何年を経ているのかわかりませんが、神社が建立されたのが明暦4年とありますから、その時に植えられたものでしょう。

この大杉が腐朽して、いつ倒れるかわからない状態となり身命にもおよぶこととなるとの意見から、衆議一決して伐採することとなり、関係方面の承認を得、払下げ業者も決まりました。

御神木大杉伐採のこの朝は、氏子総出で決別の式典が挙行されました。

人びとそれぞれの数多い思い出を語り合いながら……思えば、昭和30年の出来事でした。写真の氏子たちも、その半数が既に故人となっています。

118. 水車小屋のある風景

撮影：昭和29年４月

勢いよく水の流れ落ちる音がする、小屋の中からはコットン、コットン杵の音がしています。

陽光が輝いてきました。早春、田舎の風景です。今はもうこの地方でも水車を見かけることはできません。

観光地では、観光用水車を見ることはありますが、本物の水車の情緒はわいてこないですね。

このような水車小屋が部落に１～２か所あって、農家共同所有で順番に利用して米つき（精米）、粉ひき（製粉）の仕事一切を引き受けていたのがこの水車でした。

時間は長くかかったけれど、この水車時代は貧乏を忘れさせてくれたような思い出があったものです。

119. 乙女ごころ

撮影：昭和31年４月

山の雪も日増しに溶け、いろりに山のように木炭をくべた寒い冬も去り、やわらかな陽光を受けた山肌に、霞が棚引き春を告げています。

この山や草原も、もうすぐ若草が燃え上がることでしょう。

娘さんかな？かすりのもんぺ作業衣に姉さんかむり。でも、隠せないのが乙女ごころ。高くそびえる火の見やぐらからは見えない胸の炎を内に秘めて、可憐に咲く富士桜のように飾りけのない姿こそ、美しく目にしみ入るような、そんなひとときの眺めでした。

120. 田植えの思い出

撮影：昭和31年６月

６月ともなると、やはり田植えを思い出します。私が子どものころの田植えは大変な肉体労働であったけれど、農家の年間行事であり、お祭りでもあったのです。

私がはじめて田植えの手伝いをしたのは、小学校４年生の時でした。その頃は小学校も“農休み”が10日ほどあって、農繁期の手伝いをするための休みでしたので、私たちにもできる作業の“縄張り”をやったものです。６年生のころには馬の鼻取りです。もちろん裸足だったので、麦の切株を踏んだときは足の指の間にささり、たまらなく痛いのです。膝から指の先まで傷だらけになって田植えをやったことは忘れられない思い出です。

121. 屏風岩の景観

撮影：昭和31年7月

五竜の滝の下で黄瀬川と合流する支流佐野川の上流には、300mにわたって溶岩が浸食され奇形を見せている渓谷があります。これが、景ケ島、屏風岩と名づけられている所です。

景ケ島は、中央に西行法師が手植えしたといわれる松の木や、コケむした石仏や石塔に囲まれた依京寺があり場所もすぐわかりますが、屏風岩はここに行く公道がないため、上の道路からでは所在がわかりません。このような関係からここの自然は10年1日のごとく変わったところは見られないようですがいかがでしょうか。

市民の皆さんの中にも屏風岩のある場所を知らない方もかなり多いのではないでしょうか。

122. 三菱アルミとの調印式

撮影：昭和35年8月

いまはすでに故人となられた小林秀也氏が裾野町長に就任されたのは昭和35年1月10日でした。その当時の裾野はまだ山村で産業も農業が主体でした。戦後15年、他産業の振興に伴い農業経営にもかげりが見えはじめてきた当時です。

小林町長は、工業立町を提唱して議会の賛同を経て工場誘致条例を制定して工場進出に努力を傾注したのです。

もちろん工場が立地するについては、公害のない工場が条件でした。この写真は、誘致条例に基づいて三菱アルミニウム㈱との調印式です。このように当初から工場公害の出ないように努力したのです。

123. 矢崎電線裾野工場の竣工

撮影：昭和36年9月

昭和36年9月、矢崎電線裾野工場が設立されました。昭和36年というと、大相撲の柏戸、大鵬がそろって横綱になった年です。昭和32年、富岡村、須山村が合併して裾野町となり、中駿5か村が一丸となったものの、農業中心の町だったので、農業の振興に力を入れました。農業構造改善事業の指定を受けて農地の基盤整備事業として畑の富士マサを除去するため、県農業機械化公社の買い求めた大型機械で富士マサ抜きを実施していました。しかし、昭和35年工業立町をめざし、工場誘致条例をつくり積極的な工業振興を図りました。矢崎電線は工場立地第1号で、昭和36年9月裾野工場が竣工しました。

124. 深良村が裾野町に合併 当時の町議会議員

撮影：昭和31年10月

市広報、昭和60年10月15日号に掲載した「裾野市の基礎を作った人々」を紹介しましたが、それは昭和32年9月1日に富岡村、須山村が合併して中裾大同団結が成立した第1回目の議会後の記念写真でした。今回、紹介するのは昭和31年9月30日深良村が裾野町に合併したときの町議会議員の記念写真です。

既に半数以上の方々が故人となられているようです。裾野町議会第1代議長は渡辺義夫氏、第2代中西章一氏、第3代市野昇氏、第4代鈴木格氏で、このときの議長は第4代鈴木格氏でした。写真の第1列中央に位置している方です。

125. 須山浅間神社

撮影：昭和33年11月

浅間神社の奥の院は、富士山頂にある富士山浅間神社で、富士山登山道の出発点はいずれも浅間神社だと聞いています。

須山浅間神社は、須山登山道の出発地点ですが、富士裾野の演習場が出来たことにより、登山道が演習場の中に入ってしまったので、閉鎖されていたものです。

富士山周遊道路「スカイライン」が出来、日本ラン下の専用道路がスカイラインに接続したため、須山地区住民の要望により須山登山道が復活して、広く登山者の利用を呼びかけています。

須山浅間神社の杉は、実に立派な巨木です。また、鳥居の彫も珍しいものです。

126. 竹細工との思い出

撮影：昭和34年12月

これは懐かしいですね。私たちは日常生活に使ってきた物ばかりです。

竹ぼうき、熊手（こまんざらとも言いました）、市場かご、しょいかご、ざる大・中・小、せいろ、しゃもじ、ごみ取り、くずかご、竹箒、メジロかご、うどんすくい、落葉かごなど、今はほとんどの物が見られなくなってしまいました。学校から帰ると木の葉かごを背負って田んぼへ馬の草を刈りに行くのが日課の一つでした。

洗ったいもを2斗ぐらい背負いかご里に入れて母が背負い、私は乳飲児の妹をおんぶして、三島の町まで歩いて行き、戸ごとに売り歩いたものです。昼までかかっても売り切れなかったり、思ったより早く売り切れる時もあったりして、帰りにだんごを買ってもらい食べながら帰るのがうれしかったものです。懐かしく思い出されます。

127. 元旦の富士山

撮影：昭和27年1月

平和日本をめざして、焦土の中から立ち上がり、頑張り抜いて45年、経済大国日本のレッテルが張られるまでに至りました。しかし、この発展の過程には各界、各分野で大変な努力研究がなされたことでしょう。押し寄せる高度成長の中にあって、我ら老人はあぜんとするばかりです。こうした中で心を慰めてくれるものがあります。四季折々の変化を伴いながら悠久に変わることのない大きな自然の景観、裾野が誇る裾野の富士山です。

この写真は、39年前の元旦に撮影した景観です。年の始めにふさわしく万物を包容する姿は今も変わりません。

128. 故人政治家を偲ぶ

撮影：昭和35年2月

今は故人の小林秀也さんは、裾野町長として昭和35年1月10日から昭和43年1月9日まで2期8年、多難な裾野町政を担当して市の基盤を築かれました。

昭和51年1月10日、岩崎亀氏（故人）の後を継いで市長に就任、昭和53年1月9日病気のため退任するまでの市政を担当されました。

小林さんはどちらかといえば、豪放磊落（らいらく）というタイプの方でしたが、内面はにかむところもありました。

この消防の制服を着用したときは、子どものようにはにかんでいた姿が目に浮かびます。町長就任の1か月後のことでしたから……。

129. 鈴原橋の竣工

撮影：昭和34年3月

裾野市茶畑の箱根山麓を流れる入田川の流域は、当時農耕地が多く、このため入田川には多くの橋が架けられてあり、多くの方に利用されていました。その中の一つ鈴原橋が流失しましたが、たぶんこの橋の流失は前年の狩野川台風の折の流失ではなかったかと思いますが、どうだったのでしょう。

とにかく、入田川は箱根外輪山西斜面に降った雨が直に、流入するため護岸の決壊や橋の流失、農地に対する被害など大雨の都度、続失したものです。この鈴原橋も昭和34年3月に復旧竣工して、関係住民を喜ばせました。今は、開発が進み木橋などはなくなっていることでしょう。

130. 子ども会結成準備会

撮影：昭和34年４月

昭和32年、合併により裾野町が誕生して１年半、町民会館、公民館が建設されました。この年、子ども会を結成する動きが始まりました。県の指導により小学生を対象に、各市や町で子ども会結成の準備に入ったのです。

この子ども会を作る目的は、福祉事業の一環として少年福祉の立場から、心身の健全育成と非行防止が大きな柱でしたので、行政上は福祉事務所または福祉関係課が担当窓口になりました。

裾野町では、各地区ごとに説明会を行い、世話人（父兄）及び子ども代表者が参集して準備会を重ね、昭和35年裾野町子ども会連合会が結成されました。

131. 修業の道程だろうか

撮影：昭和29年５月

竜沢寺（三島市沢地）といえば、佛門の修業道場で一般には近寄り難いところでしたが、知人の紹介を得てお願いをしたところ、心よく承諾していただきました。それは桃園山定輪寺にある「宗紙法師の墓」に墓参りをして、農場山周辺を散策してもらうことでした。役僧ばかり７名、なお上層が１名の計８名、「このようなことは初めてだ」と言われました。

宗紙法師の墓参り（法師の旧墓所）を済ませて、茶園の西側斜面を歩きましたが、道路でない土手を嫌な顔も見せず歩いてくれました。さすが修養の道に徹しているのだと頭の下がる思いでした。

132. 郷土の偉大な政治家

撮影：昭和34年６月

10年ひと昔というように、10年の歳月は長いのに、６期24年間戦後の混乱した県政を県議会議員として、昭和22年４月１日から昭和46年３月31日までの長い間活躍し、県東部にその人ありとうたわれた政治家（岩崎亀氏）です。

また、続いて昭和47年１月10日から昭和51年１月９日までの１期４年間裾野市長として、初代遠藤佐市郎氏のあとを受け２代目市長として、誕生したばかりの裾野市を発展著しい現在の裾野市に導く基礎をつくった偉大な政治家です。

今は故人となられましたが、31年前は写真でみるようにこんなに若々しかったのですね。

133. 巨峰ぶどうの昨今

撮影：昭和29年７月

巨峰ぶどうといえば露地ぶどうの王といわれ、岡山県方面がはじめの産地でした。最近では山梨県甲府地方をはじめ、ぶどうの産地といわれるところでは、かならずといっていいほど巨峰ぶどうを栽培していますが、静岡県で生まれたことを、産地の人たちもあまり知らないようです。

巨峰は、田方郡中伊豆町上白岩の大井上農場において育成作出されましたが、なぜか県下での栽培は少なかったのです。

裾野では、千福、御宿の篤農家が栽培して、評判は良かったのですが、非常に多くの労力を必要としたため、年々栽培者が減少して、現在栽培しているのは１農場だけではないでしょうか。今は非常に評判が良く、ゴルフ場などで土産物に間に合わないほどだそうです。

134. 黒富士によせて

撮影：昭和30年８月

悠久変わらぬ霊峰富士山の姿、しかし、点景は時代に応じて変化していきます。

この富士の姿は黒富士、私たちは富士山の麓に住んでいるから見える時には自由に撮影できますが、遠方から富士山の写真を写しにくる人たちはなかなかその容容を見せてもらえないといいます。ベテランは、台風の過ぎた翌日は富士山を写す絶好の日だといいます。

この日は、前日小さな台風が過ぎた翌日の夕方でした。旧東中学校のグラウンド、日中は暑いので夕刻を待って、近づいた運動会の練習中です。現在から30年以前の何かがうかがえるでしょうか。

135. 旧須山登山道を歩いた思い出

撮影：昭和34年９月

裾野町議会の経済委員と経済課職員で、旧須山口登山道を歩いてみようということになりました。幸い委員の中に、富士山のことなら何でもわかる渡辺徳逸先生がおられたので、先生の案内で実行しました。

コースは十里木、水が塚、暮岩。写真は暮岩の上方、宝永山の下、植生限界の周辺で休憩しているときのものです。宝永山の頂きに古富士の頭が見えています。

そのあと、夏子山の下を通り、行者河原に出て、これを横切り第３尺口へ。ここから更に尾根を越えて、御殿庭に至り、須山登山道は、御殿場登山道と合流します。

136. 宗祇法師の歌碑

撮影：昭和34年10月

室町時代中期の連歌師「宗祇」は、旅の途中箱根において死亡したと言われています。

宗祇と桃園山定輪寺との交誼は深かったので、なきがらは定輪寺に葬るよう申し残したと言われ、弟子たちがなきがらをかついで定輪寺まで運んで葬ったと言われています。

定輪寺も古くは現在地より西側の山ふところにあったので、宗祇の墓もその場所にありましたが、東名高速道路の建設にあたり現在の定輪寺境内に移転されました。

旧墓地の東側に小さな堤があり、写真の歌碑はその堤のほとりに立てられており、しだれ桜の老木が植えられていました。

この歌碑も定輪寺境内に移されました。

137. 沢庵大根収穫のころ

撮影：昭和32年11月

戦後12年、このころの農業はまだまだ生産物の不足しがちな時代でした。従って、なにを作ってもよく売れました。

今は、スーパーやショッピングセンターに行けばどんな漬け物でも売っていますが、昔は漬け物の加工品など売ってなかったので、農家以外の家でも自家製でした。ことにたくあんは、年に1回で年間の必要量を漬けるものですから、農家では大忙しでした。畑に水と4斗樽を持ちこみ、掘り取った大根を洗い、束ねて干し竿に掛けるのです。西風が吹く寒い季節なので、手はヒビ割れがして大変でした。暮れ、正月にかけてお得意様に誘められました。

138. 柿の木の思い出

撮影：昭和40年12月

下和田方面の畑には、以前は柿の木が数多く見られました。渋柿で干柿用だったので、真っ赤に色付くまで木に鈴成りで、バックに富士山を配して、写真のよい絵写体でした。ことにカラー写真には雪をいただいた富士山と、赤い柿の実のコントラストがよく映えます。

美女と柿の木では異色ですが、都会に出ている娘が、暮れ正月の休みに帰ってきたので、庭の柿の木でちょっと記念写真。

子どものころ、お正月15日の朝早く起きて、赤飯を柿の木に付け、カツノ木で『柿の木柿の木千百俵なるかなんないか』1本1本たたいて歩いたことを思い出します。

139. 子どもの元旦

撮影：昭和33年１月

子どもの遊びも、最近はテレビゲームなど先進技術の頭脳的な遊具が出回っています。老人など目をみはるようなゲームを楽しんでいます。

昭和30・40年代ごろは、衣食住に追われて子どものおもちゃまでにはまだ手が届かなかったのですが、子どもたちはそれなりに遊びの方法を工夫しては楽しんでいたものです。正月といえば男の子は凧あげ、女の子はマリつきや羽根つきと伝統的な遊びが主流のようでした。このごろは、塾通いの勉強、勉強で子どもたちが外で遊んでいる姿を見ることが少なくなったような気がします。

140. 旧庁舎屋上からの景観

撮影：昭和32年２月

戦後12年、昭和32年といえば、富岡村、須山村が裾野町へ合併して、中巻の大同団結が成った年、裾野町章を制定した年です。裾野町とはなりましたが、富士山の麓の農村地帯ですね。三島、長泉地先には、東レ工場の進出が決まった年ですが、裾野の工業立町はまだ４，５年後のことです。

旧裾野庁舎の屋上から見た景観、右方の建物が現在の県立裾野高等学校。田んぼの中に住宅がマバラに見えます。稲むらの群があちらこちらに見えるのが懐かしいですね。

今はこの稲むらを見ることはできなくなりました。時代の移り変わりです。

141. 愛鷹橋の架け替え前

撮影：昭和31年３月

台風による大雨、集中豪雨による河川の増水により流失した橋や、流失はしなかったが一部流失や危険にさらされて通行に支障を生じた橋は、裾野地域内にも過去にたくさんありました。

愛鷹橋も度重なる黄瀬川の増水により流失の一歩前までに至ったのです。

町、水窪区民が一丸となっての陳情や、地元選出代議士の運動などで、国の補助による架け替え工事が承認されたのです。この承認を得るためには、当時、水窪区民の並々ならぬ努力が続けられたのです。

この写真は、架け替え工事のため橋桁をはずした姿です。現在の橋の前の橋のことです。

142. お姉ちゃんとまり遊び

撮影：昭和30年４月

「あんたらいい子だから、お姉ちゃんとこへ弁当もってってよ」おかあちゃんに頼まれて、お姉ちゃんのいる畑にやってきた子どもたち。お昼休みの一刻を、お姉ちゃんといっしょにまり遊びで大はしゃぎ。来月、美しいお茶の新芽が伸び出すとき、「よいお茶を摘めますように」と手入れをする娘さん。カスリのモンペにチャンチャンコ、無造作にかぶった手拭い。笑顔が美しいですね。子どもたちのカスリの着物も懐かしいですね。

こんな光景はもう見られなくなりました。昭和30年４月、ポカポカした春の昼下がりのひとときでした。

143. わが家の付近

撮影：昭和36年４月

今からちょうど30年前に撮影した私の家付近の風景です。真ん中に見える平家建亜鉛鉄板ぶきの小さな家が私の家です。

あのころは、富沢の下はずれで住宅は２軒だけ。今の市道１－５号線沿いの畑の中でした。でも、富士山の眺めはすばらしい場所です。

今では、写真全面に見える原野や畑の約３万㎡が住宅地開発されて、南町区ができました。この住宅地の中を国道246号線バイパスが通っています。

フジヘンや東陽機械の会社もできました。都市計画の住宅地域で、住宅も日を追って建築されています。

144. 春の収穫量評定

撮影：昭和28年５月

戦後８年目、テレビ放送が開始された年です。

このころの農業は食糧の増産、増産で随分と農作業の大変なころでした。主食は配給制ですから、農家では米はもちろん麦も小麦も供出制で、収穫予想に基づいて供出量が定められています。この収穫予想量を算出するために評価が行われたのです。

県の係官が立ち合いのもとに、村役場の係員、農協役員、部農会役員が出役して、各地区の田や畑を巡回。標準地の坪刈りを行い、収量の算定をして栽培面積に応じた供出量が決められました。農家は収穫してその量を供出したのです。

※坪刈り＝１坪の稲を刈り取り、これを基礎として全体の収穫量を算出すること

145. 丸江伸銅敷地内 無縁仏供養の読経

撮影：昭和36年６月

昭和36年は、裾野町に工業立地第１号として矢崎電線裾野工場が設立された年です。この写真は、工場立地第２号ともいうべき丸江伸銅株式会社の用地（7 ha）で、造成に先立ち墓地の移転や無縁仏に対する供養のため、寺の和尚さんに読経をしていただいているところです。

伸銅業界はプラスチック製品の進出により厳しくなり、この伸銅会社も運命を余儀なくされ、用地は転売されて住宅開発が行われました。現在の南町区がこの地です。

146. 涼を求めて

撮影：昭和35年８月

戦後15年を経て、日米安全保障条約改訂の調印批准に反対の運動が盛り上がり騒然としていた昭和35年当時ですが、裾野町では中瀬合併が昭和32年に完結し、生活にも活気を帯びてきたころです。

婦人方の衣装も、モンペ姿に別れを告げてファッション的な美しさが目立ってきましたが、まだ余暇などという言葉は使われていませんでした。遊びに使うだけの金はまだまだ貴重だったころですが、夏の暑さに涼をとるのは山か海でした。

裾野は富士山の麓で景色も良いところですから、涼を求めて訪れる人たちも多くあったものです。

147. 町民体育祭の思い出

撮影：昭和35年９月

故小林秀也さんは、昭和35年１月10日裾野町長に就任されました。この年は世情騒然としていたことは先月号に記載しましたが、裾野町ではボーイスカウトが設立され、須山では水稲の栽培が始まりました。

小林町長は町民一丸となった体育祭を現在の裾野高校グラウンドで開催しました。非常に盛り上がった体育祭となり、地区別の対抗競技では東地区の茶畑区が優勝したと記憶しています。写真は本部席のスナップと表彰式の模様です。

その後、体育祭の行事も変化して、現在はスポーツ記録会として大きく発展をしています。

148. 富士山御殿庭の思い出

撮影：昭和36年10月

昭和36年といえば、矢崎電線裾野工場が設立された年です。中郡が合併して、裾野町になりましたが、依然農業を中心とした農山村にすぎませんでした。

議会では、工業を中心とする工業立町の条例を制定し、矢崎電線を筆頭に丸江伸銅、三菱アルミ、トヨタ自動車などの工場誘致に成功し、当時の議会の功績がたたえられます。議会の経済委員会は、工業立町にあわせ、観光施策の必要性を唱えて、観光資源の調査を経年的に実施しました。

写真は、富士山御殿庭調査のスナップです。御殿庭の名称は、渡辺徳逸先生が名付け親と記憶しています。

149. 稲の坪刈りの思い出

撮影：昭和34年10月

稲や麦の検見や坪刈りという言葉は、年寄りでなければわからないものとなりつつあります。検見とは、稲や麦の収穫量を予想するために栽培田畑を見て回ることで、坪刈りとは、検見をしながら平均的な所、被害の多い所、多収を見込める所の稲や麦を、実際に1坪分刈り取って実収を見ることです。これらは、米の供出制度があったころ、毎年必ず行われていたものです。また、台風などの被害調査でも行われました。

この年は伊勢湾台風が上陸し、この地方でもかなりの被害を受けました。写真は台風の去った後、坪刈りを行っている風景です。

150. 青果市場の今昔

撮影：昭和35年12月

この裾野青果市場は、昭和35年12月に開業しました。戦前には二本松青物市場がありましたが、これは個人経営だったと思います。現在の市役所の筋向かい辺りにあって、富岡さんという方が経営していた記憶があります。

戦後裾野に青果市場がなく、三島の青果市場へ自転車で通ったものです。その後、御殿場市場が集荷場所を定めて集荷に回るようになり農家としては随分助かりました。現在は農家も減少してしまい、市場出荷も少なくなったと思いますが、今はどの農家でも自家用車があるので、いろんなところへ出荷しています。

151. お茶のけいこ

撮影：昭和33年1月

戦前この地方は農村部でしたので、お茶のけいこをしている娘さんなど数える程しかいませんでした。お嫁入り仕度には、和裁のけいこぐらいでした。

国をあげて高度成長を遂げ、生活文化も思わぬ速度で発展し、国民全体が種々の文化に接し、色々な趣味も身につけるようになり、娘さんといわず、年長の婦人たちもお茶のけいこをすることが多くなったと思います。もちろん、ご婦人だけでなく、男の方もお茶のけいこをしている方も多いことでしょうね。

私のような野性人でも、時にふれ、お茶をたしなみながら自然をめでてなどと思うことがあります。

152. 水車の思い出

撮影：昭和35年2月

水車の回っている風景など、今の若い人たちは見たこともないでしょうね。裾野市内でも、ほとんど姿を見掛けなくなってしまいました。最近、新たに水車を作り、観光名所にしようというところが出てきたようです。

水車は水の力を借りた動力源なのです。私の小学生時代には、母の手伝いで水車小屋へよく行ったものです。穀物を臼に入れ米をつく杵の音、小麦を粉にするひき臼の音、カッタン、コットン、カッタン、コットンと、外は水で回る水車の音、昔懐かしい田舎の音です。

153. 麦の省力栽培が始まったころ

撮影：昭和28年3月

この地方の農業の栽培作物は、米と麦が主体でした。米の刈り取り収穫から、その跡地を耕して麦をまき終わるまでの期間は、目の回るような忙しさでした。つまり、水田は米と麦の二毛作、畑は甘藷（かんしょ）やニンジンなどの根菜類と跡地が麦や野菜の二毛作、三毛作で、10月中旬から12月までは猫の手も借りたい季節だったのです。

このころ、農業の機械化として耕運機が導入されつつあった時代で、県西部地区では試験的に使い始めました。裾野町の農業技術者連絡協議会では、浜北町を訪れ、試験地を見学して勉強し、地域への導入について研究をしたのです。

154. 裾野ライオンズクラブ認証式

撮影：昭和41年４月

裾野ライオンズクラブは昭和40（1965）年９月12日に結成され，翌年４月25日認証式が盛大に挙行されました。

静岡県内で27番目の結成です。

皆さんは，すでにご承知のように，ライオンズクラブは地域社会への奉仕活動を活発に行っている団体です。紙面の関係で詳しくは述べられませんが，主な事業の一つに献眼運動があります。献眼登録受付を行っているもので，熱心な運動と，皆さんの温かいご理解に支えられて，昨年末（平成４年）現在で1,781名の登録と，献眼者96名の崇高なご奉仕をいただいたそうです。

155. 児童植樹リレー

撮影：昭和31年５月

児童福祉の効率をはかるため，裾野町，深良村，富岡村，須山村が一丸となり，中駿児童委員協議会を設置して児童福祉の向上に協力したのです。この記念行事としてこの年の５月５日こどもの日を期し，「植樹リレー」を行うことになりました。この日，中駿の児童代表300人が集まり，各地区ごとにモクセイの幼木１本を運び，沼津にあった東部福祉事務所までリレーして，事務所の庭で植樹を行いました。所長さんをはじめ職員総出で，無事に植樹を終わり大変喜ばれました。写真は，裾野駅前に集合してリレー出発の一場面です。

156. 宗祇法師の旧墓所

撮影：昭和34年４月

室町時代中期の連歌師宗祇は，市内にある桃園山定輪寺との交流が非常に深く，生前からお弟子さんたちに，俺の死後は定輪寺に葬るようにと申しつけていたといわれています。

旅の途中，箱根山中あたりで死亡し，お弟子さんたちが師の亡骸を担いで定輪寺に至り埋葬したと伝えられています。その墓所は定輪寺境内西の山腹にあったのですが，東名高速道路の建設により移転せざるを得なくなったのです。現在は墓所，歌碑ともに定輪寺境内に移され，丁重な法要が続けられています。

157. おかいこさん

撮影：昭和35年7月

この地域は、戦前中駿地方と言われ農村地帯でした。しかし、農耕面積が狭小で農作物も産地的な産物は少なく、殆々の農家によってあらゆる作物が栽培されていましたが、経済的には恵まれていたとはいえませんでした。

このような農家経済の中で養蚕は大きな財源でしたから、養蚕農家では「おかいこさん」と呼んで大事に大事に飼育したものです。農協泉支所あたりに繭市場があり、繭かきが終わると父が大きな袋に繭を入れて、天秤棒で担いで売りに行くと、家内中でその成果を期待して父の帰りを待ちわびていたものです。

158. 子ども会リーダースクラブ勉強会

撮影：昭和36年8月

児童福祉を進める一環として、子ども会活動の奨励指導が打ち出され各地において子ども会が誕生しはじめたころ、昭野町においては他市町村に先がけてこの活動が活発となり、各区全部に子ども会が誕生しました。しかし、子ども会がどのような活動をしたらよいかわからないので、中学高学年生や高校生の中からリーダースクラブを作り県から講師を招き、子ども会世話人役員と共にリーダースクラブの勉強会を数回にわたって実施しました。これを後輩から後輩に引き継いで、子ども会活動の充実をはかりコミュニケーションをはかってきたのです。

159. 竹枯し試験の思い出

撮影：昭和34年9月

農業用除草剤の使用が始まったころ、県の林業関係課では、山林内の竹笹などを枯死させる除草剤について、試験的な散布を行うことになりました。そして、箱根山三国峠に連なる神奈川県境にそった茶畑山が試験地に決まりました。当時は、箱根山に芦ノ湖スカイラインができていませんでした。ここは、芦ノ湖から吹き上げる強い風で、かん木がわずかに生えており、箱根竹が足の踏み場もないほどビッシリと生い茂っている所でした。ここを試験地とするため、地元茶畑の方々に苦役していただきました。しかし、あまりにも密生していた箱根竹のため試験は失敗に終わりました。

160. 忠ちゃん牧場

撮影：昭和36年10月

おなじみの忠ちゃん牧場。これは昭和36年10月当時で、牧場に羊を放牧したころの風景です。この場所は、元演習場内に含まれており一般利用はできなかったので、乳牛の立ち入り許可を得て草を喰わせたのがはじまりです。昭和28年ごろだったでしょう。その後、種々の変遷を経て、この地は国有財産払い下げにより須山関係者の所有となり、その関係者の承諾を得て正規の牧場経営がはじまったのです。

雄大な富士山の真下で見る牧場。ただそれだけで絵になる風景ですが、最近は観光牧場としてジンギスカン鍋などもあり、観光客の好評を受けているようです。

161. 農繁期の思い出

撮影：昭和35年11月

農業機械の普及により今の農繁期はいつごろなのかわからないほどになりました。昔の農業は大変な労力を必要としたのです。ことに6月の田植え時と秋の収穫時期は、『猫の手も借りたい忙しさ』と形容されました。秋の稲刈りはもちろん手刈りです。刈った稲は小さく束ねて掛け干しにする。子供もできるかぎりの手伝いをします。刈り取りは大人、刈り取った稲束を運んで掛け干しにするのは子供たち、できることを分担作業です。稲の収穫を済ませると次は田をおこして麦まきです。山の畑からは早く掘り取ってくれと、さつまいもの声が聞こえてきます。

162. 麦まきのころ

撮影：昭和33年11月

麦まきもあと2、3日で終わりです。その後は落葉かきやらタキギ取り。お正月を前にまだまだ忙しいけれどまきつけが終われば、やれやれ一段落です。この地域は水田がほとんどないので畑に陸稲の作付けが多かったから陸稲のあと地を耕さなければならない、おかぼ地うないと言って、これがまた大変な重労働だったのです。作業は夕陽が沈んで薄暗くなるまで働きます。『さあ、ぼつぼつしまうか』おやじさんがそう言ったころにはもう腰が痛くてまっすぐに伸びなくなっています。こんなことを思い出していると昔の人たちの働きぶりが浮かびます。

163. ツツジの早咲き試験

撮影：昭和39年12月

花木園芸の分野では、ビニールの出現以来あらゆる種類と言っていいほどの促成栽培が普及しましたが、ツツジの花は難しく世界の植物学者が開花促成に取り組んでいました。静岡県農業試験場でも、ツツジ栽培の産地伊東市の田代で3年間早咲き試験を行いましたが不成功に終わり、試験を中止しました。筆者は、裾野町役場の経済課に奉職していたので、ツツジ栽培を普及していたため、県農業試験場にお願いして県と町の共同試験を行い、標高1,400mの高冷地利用の促成栽培により見事に1回の試験で満開となる成功を収めました。昭和38年12月15日開花を始め、20日には満開となりクリスマスに利用されました。写真は昭和39年の筆者ハウスでの開花写真です。

164. 富士山とカヤブキ屋根

撮影：昭和35年２月

富士山の見える所にカヤブキ屋根の前景など貴重な風景だと思います。とは言っても33年も前の写真ですからこの家も改築されたので、この風景をもう見ることはできません。どこへ行っても、思いもよらぬ早さで開発が進んだので、残しておきたかったなぁと思うような自然もなくなりました。十里木方面も観光施設や別荘などずいぶん開発されましたが、このころはまだ静かな山里で、東京方面から来る人たちが必ず口にする言葉は、『空気がおいしいなぁ』でした。いつまでも良い環境を残したいものですね。

165. 千福共同作業所の完工

撮影：昭和35年３月

昭和35年は日米安全保障条約改定に調印、６月国会で批准反対運動が盛りあがったり、浅沼社会党委員長が刺殺された年です。須山では水稲の栽培が始まりました。千福では、国の補助で農業の共同作業所を建設して、共同作業所や共同農機具の収納場所にしました。国の補助は、この作業建設が『新農村開発事業計画』に認定されたためです。作業所の完工を祝って餅がまかれました。故人となられた当時の裾野町議会議長の市野昇さんをはじめ、経済委員や地元有力者の方々の姿が見えます。この建物も今はもうありません。

166. 草競馬のあったころ

撮影：昭和31年４月

昭和31年といえば戦後10年、食糧難の危機はようやく明るさが見えてきたころで、９月には深良村が裾野町へ合併、御殿場線にディーゼルカーが運転された年です。

裾野地帯はまだ農業を主とした農山村だったので農業が産業の主力になっていました。草競馬は当時、農民にとって年に一度の楽しみな行事でした。農家の若者たちが我が家の愛馬にまたがり駆けくらべをするのですからスタートから大変です。勝って優勝旗を肩に意気揚々と帰路につく馬も、なんとなく誇らしげな顔に見えたものです。

167. 麦の刈取機実演

撮影：昭和36年５月

この年は、須山に水稲栽培が始まった年で、農業の機械化はまだまだ程遠い感がありました。このころはまだ水田は二毛作で、稲の収穫のあとは麦類の作付けで、大麦、小麦、ビール麦などのまき付けをするため非常に多忙な秋でしたが、今度は５月になると麦を収穫して直ちに田植えシーズンに入るので秋以上の忙しさだったのです。

しかし麦類は全部手刈りだったのでこの省力の機械化は容易ではなく、機械メーカーも非常に苦心したのですが良いものはできませんでした。これは初期の刈取機の実演でしたが、時代の推移とともに麦類の栽培が減少し、ついには作付けがされない状態となり、麦の刈取機は完成を見ないまま姿を消したのです。

168. 養蚕のころの思い出

撮影：昭和35年６月

養蚕（カイコ）とは、カイコを飼育して生糸をつくるための繭をとることです。養蚕は、カイコの食事となる桑の栽培がなくては出来ません。まず蚕種製造所から蚕卵紙を購入し、用意した蚕室で蚕卵紙からふ化させ蚕座に移し、一令、二令、三令とカイコに適した桑の葉を与え五令まで飼育する。成熟したカイコをシキタと呼びました。繭をつくらせるためにまぶしにうつします。モズに入れるといい、上蔟のことです。カイコはこの中で繭をつくります。繭が出来上がりカイコが完全なサナギになれば、繭かきといってきれいに繭をとり、大きな袋に入れて天秤棒でかつぎ、繭市場に持って行き競り売りに掛けます。重労働ではないが大変気疲れする仕事でした。

169. あのときのおじいさん

撮影：昭和34年７月

昭和34年，この年は悲喜こもごもの出来事のあった大変な年でした。まず喜びでは、皇太子、正田美智子さんの御成婚です。東京国際見本市も開催されました。我が裾野町では、町民館、公民館が建設されました。騒動では，安保改定反対デモ隊が国会構内に乱入，また大型台風が伊勢湾に上陸し、大きな被害がでました。これは，「伊勢湾台風」と名付けられました。裾野を含むこの地方も、大きな被害をこおむりました。

でも、このおじいさんのように農業一筋60年。喜びも悲しみも乗り越えて，何事も超越した風ぼうにはただただ頭の下がる思いがして、悲しみの中にも喜びを感じます。

170. 子ども会リーダースクラブ研修会

撮影：昭和36年８月

広報すその平成５年８月15日号にも掲載した子ども会リーダースクラブの夏期林間研修会の様子です。子ども会の活動は、リーダースクラブのあり方にも大きく左右されます。リーダースクラブが活発な活動を行えば、必然的にその地域の子ども会はめざましい活動をします。

この日には、主として屋外で行うゲームの指導方法について勉強しました。父兄たちや子ども会世話人と共に熱心に講師の一挙手一頭足を見落とすまいと見つめる目は、真剣そのものでした。裾野町では、他市町村に先がけてこの活動はたいへん活発なものでした。

県東部福祉事務所長さんからは、たいへん好評な賛辞をいただきました。

171. みつまたの栽培

撮影：昭和32年９月

昭和31年、この年は御殿場線にディーゼルカーが運転を開始しました。９月30日、深良村が裾野町へ合併しました。西小学校では、裾野町内にはない産業を考えて、荒地や山地でもよく成育する『みつまた』に目をつけました。学校の実習地へ植栽することになり、裾野町役場経済課で富士宮市のみつまた栽培地より苗を購入して、西小学校の高学年生が約10ａの実習地にみつまたの苗を植えつけました。

それから一年間熱心に管理したかいあって、こんなに大きくなったみつまた（写真参照）を収穫することが出来ました。写真は高学年生によるみつまたの刈取り収穫の実習風景です。

172. パイプ工場のあったころ

撮影：昭和33年10月

福島軽工業株式会社、この近辺では福島のラオ工場と呼んでいました。アメリカへ輸出する竹ステッキが主として作られ、竹の原材料は福島県白川方面から鉄道の貨物車両で送られてきたようです。

このような竹の加工をする工場はおそらくこの近隣には無かったと思われます。創業がいつのころか分かりませんが、私たちが戦前にあったことを記憶しています。古い記録には明治41年裾野に竹工場（バイスケ、竹コオリ、キセル竹始まる）という記事がありますので、たぶんこの工場の前身だと思われます。

その後巻タバコが多くなったのでタバコ用の竹パイプも盛んに作られました。

173. 工場敷地のその後

撮影：昭和36年11月

伸銅とは「しんちゅう」のことで、銅に亜鉛を加えた合金で、この合金を棒状に押し出したしんちゅう棒のことです。丸江伸銅株式会社は、このしんちゅう棒を製造する会社で本社は京都駅前にあり、当市の富沢地区へ進出したのが昭和33年ごろです。しかしその頃、プラスチックの出現によりしんちゅう製品は衰退の一途をたどり、丸江伸銅は小規模の工場を建設して数年間操業を続けましたが、ついに閉鎖することになったのです。

その後、この敷地は住宅用地として転売されて、住宅地に造成され、現在の南町区になりました。この写真は伸銅建設前の用地です。

174. 富士マサ抜きを始めたころ

撮影：昭和33年12月

富士の裾野の演習場に連接した広大な農耕地には、富士マサといわれる不透水層があって、その上に黒ボクといわれる作土があります。水を透さないマサの上の黒ボクの厚さは20cm前後で、雨が降るとドロドロになり、頭られた作物しかできませんでした。

富岡村と須山村が裾野町に合併した昭和32年に、農業構造改善事業として、県に依頼して農業機械化公社を設立してもらい、大型農業機械を導入して富士マサ抜きを実施することになりました。

この写真は、大型機械の深耕によるマサ破砕の実況を査察する県農林水産部長ほかの皆さん方です。

175. あのころの裾野駅前通り

撮影：昭和34年1月

この年の1月30日は静岡県知事選挙が行われました。昭和34年といえばまだ裾野町で、町長は故渡辺義夫さん、助役は故杉山繁惠さんでした。まだテレビも白黒の時代です。当時の裾野駅前通りです。商店街も現在とは大分変わっています。写真右側の一番手前が旅館清水館でしょうか。中川電気店や松屋洋品店の看板が見えます。左側手前はラーメン屋の水野屋、洋品店の杉山商事、杉山青物店と続きます。40年近く経つと商店街の様相も変わっていくので、小生も記述しながら当時の面影が薄れているのに気がつき自分が年をとっているのに気付きます。

176. 十里木の思い出

撮影：昭和35年2月

この写真はどこかわかりますか？ちょっとわからないでしょうね。富士山の姿から見て、場所は十里木方面だろうとは思いますね。ここは、十里木にある旅館十里木館の前の小高い丘に設置された百葉箱での一こまです。その後、私もこの地を尋ねたことがないので、今はどのように変わっているかわかりませんが、驚くほど変わっていることでしょう。カラーテレビはこの年に放送が開始されました。須山に水稲の栽培が初めて行われたのもこの年でした。農家の娘さんではないのでしょうけれど、モンペ姿がとても似合いますね。

177. 十里木の思い出Ⅱ

撮影：昭和35年3月

この写真は2月15日号の広報すそのに掲載した写真のすぐ近くで撮影した写真です。モデルの娘さんも同じ娘さんです。須山村が裾野町に合併したのが昭和32年でしたからまだ日は浅く、殊に十里木方面は私たちにとっては印象が深く、写真撮影にはことかかない、たくさんのモチーフに恵まれているところでした。

十里木という名称は、その名の由来にしろ根拠にしろなんとなく伝説を感じさせるような、また詩情を感じさせるような気がしますが、古老の方々に聞いてもわからず、記録的な文書類もないようです。

178. 旧市民会館のオープン直前

撮影：昭和34年6月

昭和32年富岡村、須山村が裾野町に合併して中駿五か村の大同団結ができ、裾野町発展の礎が整ったのですが、当時は会合場所がなく、庁舎の屋上を利用していました。

町民待望の町民会館が建設されたのが昭和34年夏、裾野町もやっと一人前の自治体になったようなよろこびを感じたものです。以来30余年、市民の文化向上の立役者はその役割を果たして消えました。移り変わる時代の変遷というのでしょうか、感慨もひとしおです。

写真は旧市民会館が完成したオープン直前の姿です。

179. お茶の香り

撮影：昭和28年5月

むかしから、5月となればお茶つみがはじまります。しかしこの地方ではお茶の栽培専業農家はありませんでした。畑の境とか周囲に植えて、年間自分の家で必要なお茶を得るだけの栽培でした。雲さえなければこんなに美しい富士山を眺められるところですから、お茶の味もなかなか美味だったのですが、農家も地域で決まった作目があるため、お茶専業農家にはなれなかったのでしょう。

子どもの頃、八十八夜になるとどこの家でもお茶つみで、手伝いをしたことを思い出します。いまは茶専業農家も数家あります。

180. わが家の子供たち

撮影：昭和32年4月

終戦後の中国山東省から引き上げ帰国、食糧も衣服もない時代から過ぎてきた今を思うと感慨もひとしおです。

引き揚げ後に私の子供（長女・長男）が生まれ、その当時6歳と3歳の時の写真です。尚、広報紙を利用して自分の身内の写真を紹介するなどは市民の皆さんに大変失礼とは存じますが、記述者の冥加としてお見逃し下さい。

181. 巨峰ぶどう栽培の推移

撮影：昭和28年５月

巨峰ぶどうは中伊豆町にある大井上農園で研究育種されたぶどうです。大粒種として知らない人はいないほど有名で、このすぐ近くで作り出されたのに、なぜか県内にはこれといった産地がないのが不思議なくらいです。

裾野では、千福・御宿方面の篤農家10数人が研究栽培を昭和20年代に始め、すばらしい巨峰が収穫されて人気も高かったのですが、立地条件や気象条件により多くの人手を必要としたため、栽培者は激減してしまいました。当時は、見学者も多く評判でした。現在は御宿の磯部農園で栽培されています。

182. 御殿庭のおもいで

撮影：昭和37年８月

この昭和37年当時、裾野としては観光関係の芽があがったころでした。町議会産業経済委員会と、裾野町商工会の合同で富士山麓の観光資源開発を行うこととなり、第一歩として須山登山道の調査をすることになりました。

この写真はそのときの「御殿庭」での記録写真です。現在ではすでに半数以上の皆さんが故人となられたのではないでしょうか。

「御殿庭」は、スバルラインの御殿、奥庭に比肩して須山の渡辺徳逸先生が命名したと覚えています。たいへんすばらしいところです。

183. 須山登山道

撮影：昭和36年９月

富士山観光資源開発調査の一行です。この折は裾野町議会産業経済委員会でおこなった最初のときの写真で、須山登山道の「幕岩」に至る手前あたりです。都会人に言わせると、このあたりの空気は非常においしいと言います。

あれから35年、その後は訪れていないが、散在する自然植生等も随分変化したことと思います。

184. 四ツ溝柿の品評会

撮影：昭和33年10月

今でこそ少なくなりましたが、この地方にはどこの家にも四ツ溝柿の木が植えられていました。シブ柿だが脱渋すると甘味が出て非常においしい柿ですが小果が玉にキズで、農家では大型改良に努力したものです。この成果をあげるため毎年秋に四ツ溝柿品評会を開催したものですが好成績を挙げるまでには至りませんでした。現在お隣りの長泉町ではグループによる産地化により好成績を挙げているそうです。

アシタカツツジ

広報すその原稿用紙（3月15日号）

標題 十里木の思い出 B　　P 富沢 田口勝夫　　昭和3年3月撮影

1 この写真も2月15日号の広報すそのに掲載した写真
2 の指呼の間にある場所での撮影写真です。モデルの娘さ
3 んも同じ娘さんです。須山村が裾野町に合併したのが昭
4 和32年でしたからまだ日は浅く、殊に十里木方面は私
5 達にとっては印象が深く、写真撮影には事かかない深山
6 のモダーンに恵まれしいるところでした。十里木という
7 名称は、その名の由来にしろ根拠にしろなんとなく伝説
8 を感じさせるような、また詩情を感じさせるような気が
9 しますが、古老の方々に聞いてもわからないし、記録的
10 な文書類もないようです。

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕

㉕×10

田口勝夫氏 自筆原稿

あとがき

『ふりかえる裾野』の編集にあたっては、広報紙掲載の原稿を最優先に考え、写真についても、広報紙で使用したものを用いるようにしましたが、一部見当たらないものに関しては、田口勝夫氏が撮影したフィルムをご遺族より拝借し、文意を損ねない範囲で、別のカットを用いました。また、それでもままならない写真については、広報紙からそのまま転載させていただきました。そのため、一部不鮮明な写真が使用されていることをご了承ください。

ふりかえる裾野

初　版／平成7年10月1日

寄稿者／故・田口勝夫氏

企　画／裾野市役所企画調整部広報広聴課
編　集　〒410-11　静岡県裾野市佐野1059
TEL（0559）92-1111
FAX（0559）93-7680